

恋愛パズル

プロローグ

物が少ないのに雑然として見えるのは、引越しの荷物が片付けられていないせいだろうか。

部屋の主はベッドに寄りかかり、片膝を抱えたまま微動だにしない。まだカーテンが付けられていない窓に、どこからともなく飛んできた枯れ葉がぶつかって落ちる。それをなんとなく目で追ってから、再び視線を戻した。

「将……」

名前を呼んでも反応がない。引越しをしても、まだあの人は将を苦しめている。将の笑顔を最後に見たのはいつだろう。どんなときも笑顔で場を盛り上げてきたのに、今の彼には表情がなく、心もどこかへ行ってしまった。

将の足をオレンジ色に染めていた夕日が、窓に吸い込まれるようにその照射範囲を縮めていく。立冬に向けて少しずつ日が短くなり、秋の訪れを感じさせていた。薄暗くなった部屋に寒さを感じるのは体感温度のせいだけではない。

「今度、久高君が紅葉狩りにでも行こうって」

できるだけ明るく声をかけて、将に近づく。そして、あと一步の距離を残して立ち止まり、将を

見下ろした。こんなに苦しんでいるのに、私は何もできない。

きゅっと唇を噛みしめて、自分の不甲斐なき、無力さを悔しく思う。十年以上友達をやっているのに、何の役にも立ちやしない。

かすかに将の髪が揺れた。目の錯覚かと疑った次の瞬間、スローモーションのように将がゆつくりと顔を上げていった。伸びた前髪に隠れる顔半分。はらりと落ちた髪の間から見えた将の瞳。瞳は私を映しているのに、将は私を見てはいない。虚ろな瞳は私ではない何かを見ている。

どのぐらいの時間だろう。将と私は見つめ合っていた。コチコチという時計の音がやたらと耳に残る。張り詰めた空気の中、将が息を吸った。

「……夏菜子」

掠れた声が私の名前を呼ぶ。部屋が静かだからこそ聞き取れるぐらいの小さな声。

「なに？」

深呼吸をするように、肺に空気を取り込み、静かに返事をした。

「前の部屋では麻里の面影に縋っていた」

将の口からあの人の名前が出ると、胸が苦しくなる。でも、口になっている将は私以上に苦しそうに見えた。

「この部屋には何も無い。……麻里の面影も、……思い出も」

あの人と一緒に住んでいた部屋にいたら、将はいつまでもあの人の影に囚われたままだった。だから、半ば強引に引越しを勧めたのに。

「……情けないだろ。男のくせに」

嗚咽おとげの混じり始めた将の声に、こちらの涙腺が先に駄目になりそうさ。『将は情けなくなんか無い』、そう伝えたいのに、声にすると泣き出してしまいそうで、必死に首を横に振る。

「一人でいることが……、誰もいないことが……無性に寂しいんだ」

搾り出された声が今の将の全てを物語っていた。家に誰かいるのが当たり前前の生活が続き、それを失い——その場所も失った。

どうしても将に会いたくて、引越し祝いを渡すなんて口実でやってきたけど、まさかこんな状態になっているなんて思ってもいなかった。

手にしていた荷物を床に下ろす。将が今にも消えてしまいそうに思えて、その場に膝をつくこと、存在を確かめるように彼を両腕で包み込んだ。私のほうが小さいけれど、片膝を抱え込んでいるおかげなのか私の腕でも間に合ってしまう。

「一人じゃないよ。私がいつでも傍にいるよ。だから……」

戻ってきて。いつもの将になつてよ。笑顔を見せてよ。

言葉にならない思いが次々に胸に溢れてくる。初めて感じる将のぬくもり。こんなふうに触れたことは今までなかった。

「毎日っていうなら、毎日来る。夜が寂しいっていうなら泊まる。ぬくもりが欲しいなら……それも。私にできることなら何でもするよ」

私は将が元に戻るならどんなことだって……。私にとって、将は友達以上の存在だから。肌と肌

が触れ合うぬくもり。それ以上のことだつて構わない。

「夏菜子……？」

私の言葉に将の声が困惑に揺れる。こんな状況なのに、ようやく私の存在を認識してくれたことが嬉しいと思つてしまう。

「私、ほら今は彼氏いないし、こんなこと言つと変かもしれないけど、女だつてたまには……そういう気分になるときもあるつていうか……」

しどろもどろになりながらも、すごいことを言つてしまう。急に恥ずかしくなつて、ぱつと体を離して将を盗み見ると、俯うつむいて何かを考え込んでいた。

「私なんかじゃ駄目か。ごめん。変なこと言つて。でも、将のためにできることなら何でもするつて言つたのは本当だから」

私の言葉を将はどう思つただろう。軽蔑したかな。それとも……

「そんなこと言われたら……、夏菜子を利用するぞ」

暗くなつた部屋で、正面から私を見ている将の目にほんの少し光が宿つた。

「……いいよ」

本当にこんな方法がいいのかわからない。この状況を利用しているのは将じゃなくて私。近づきたくて、弱みにつけこもうとしている。

「優しくできなくてもいいのか？」

「……うん」

一つ一つ確認する将に私はすべて肯定していく。自分から望んで、そう仕向けた。だから、後悔はしない。

日が沈み暗くなつた部屋の中、互いに言葉はなく、衣擦きぬすりれの音だけがやたらと耳につく。ブラジャーとショーツを残しただけの姿になり、同じくトランクス一枚になつた将に視線を向けた。

「本当にいいのか？」

「いいつてば。ほら、セフレつてあるじゃない。あれと一緒に。割り切ろうよ」

自分で言つていて嫌になるな。私は将を好きな気持ちを隠しているだけで、全然割り切れてなにかいないのに。寂しさを埋めるために体を重ねる将と、好きな相手を騙して体を重ねる私。どつちのほうが悪いかな。

ベッドに並んで座ると、私は将の腕に包まれた。その腕に手を添えて、思考を止める。ずっと望んでいたぬくもりを手に入れる……、今はただそれを感じよう。

一生触れることはないと思つていた将の肌。あたたかな手が私の背中を撫でる。存在を確かめるように。もう涙は零こぼしてはいないはずなのに、将がまだ泣いている気がした。ここまで将の心を掻き乱すあの人を恨む気持ちはある。でもそれ以上に羨うらやましかつた。姿を消してもなお、将の心を探えたままなくて。

「将」

名前を呼んでも返事はない。首筋に柔らかな感触がして、それが将の舌だと理解した瞬間、体が

強ばった。

こんなことを言い出しておいて、経験不足というのは致命的かもしれない。将が負担に思わないように軽く提案してみたけど、私の過去の経験は二人。そのどちらも、半年と続かずに別れてしまっている。そう考えたら、二十九歳という年齢にしては少ないほうだろう。正直、体で慰めるなんて、全く自信がない。それでも、将がこの状況から抜け出せるのなら、そのきっかけになるのなら「んっ……」

過剰な反応をしないようにと思っていたのに、将の手が胸に触れた瞬間、声が漏れてしまった。ほんの一瞬、将は動きを止めたけど、何も言わずに再び手を動かす。

付き合っている人に抱かれながら、これが将だったらどうなるんだろうって考えたことがあった。今、それが現実になっている。両思いになったわけでもないのに。

「んん……っ」

ショーツが引つ張られる感覚に腰を上げると、するりと足から抜かれた。次いでブラジャーが外される。少し肌寒さを感じて、自分の腕をさすった。

「寒いか？」

「ううん。平気」

お腹を撫でる将の手の平から伝わる熱。手が温かい人は心が冷たい、なんて聞いたことがあるけど、それって本当かもしれない。だって将の心は、ここにはない。

トランクスを脱いだ将がほんの少しの間もないぐらいに密着してくる。全身で将の体温を感じ

た。抜け殻になってしまっても、ちゃんと将の心臓は動いている。私の胸に感じる鼓動。

「俺、最低だな」

ポツリと将が呟いた。私の肩に頭を預けたまま、将はかすかに震えている。その背中に両手を回して少したけ力を入れた。

「今はいいんだよ。何も考えなくて」

将に言い聞かせながら、その言葉を自分にも向けていた。裸で抱き合ったまま、静かに時が流れていく。将の体温のせいとか、この状況のせいとか、気付けば肌寒さはなくなっていた。お互いの体の境目がわからなくなりそうな一体感に身をゆだねていると、ふいに将が動き出した。

「やめたほうがいいってわかっているけど、やめられない。このまま、抱くぞ」

「……うん」

体の位置を変える将。そして、一際熱くなった部分が腿に触れた。私に反応してくれたのだと思うと、ほんの少し嬉しい。

将の膝が私の足を割り開き、手が潜り込む。あまり触られたことのない部分を将の指がなぞった。「ん……くう……」

潤いが足りないのに、指がつつかかりながらも奥へと入ってきて、かすかに痛みを感じる。「もっと優しくして」と出かかった言葉を呑み込み、じっと耐える。これは恋人同士の繋がりではない。だから、気持ちよくなるうなんて思っちゃいけない。

少しずつ滑らかになっていく指の動き。水音が聞こえ始めると、すつと指が引き抜かれた。

「……ゴム」

引っ越しの手伝いをしたとき、偶然目にしたのはゴミ箱に捨てられた避妊具の箱。彼女との関係を思い出させるものを残すのが辛かったのだろう。したがって、この部屋にゴムはない。

「平気、私ピル飲んでるから」

ひどい生理痛に悩まされていた私に、友人の咲季が勧めてくれたのがキツカケ。相性があると言われたけど、私の場合は副作用もなく、生理痛はかなり軽減された。日常生活に支障が出るほどの痛みだったから、そのままピルを使い続けている。このことを付き合った相手に言ったことはなかったのに、将には迷うことなく言えてしまった。

眉間に皺しわを寄せ、少し考えてから将は首を横に振った。

「万が一があると困るから」

苦しげに零した言葉ことばを聞いた瞬間、私の脳裏にあの人が浮かんだ。あの方が将から去った理由。

「そうだよ。一つだけならあるから」

床に置いたバッグへ視線を向けると、将が上からどいてくれた。ベッドから降りて将に背を向けた途端、目頭が熱くなる。涙をなんとか堪こえて、免許証入れにしているカードケースからゴムを取り出した。咲季が「避妊は男に任せてばかりじゃなくて、女もちゃんと準備しておかないと駄目だよ」と無理やり持たせてくれたのだ。気持ち少し落ち着かせて、私は将を振り返った。

「んんっ……」

ゴムが内壁を引っ張る。ちよつとの間に乾いてしまったのか、指を入れたときよりも痛みを伴う挿入にギョツと目を閉じた。

「……キツイな」

なかなか奥に進まないことに、私のほうが申し訳ない気持ちになるが、将はやめることなく押し進もうとする。引き攣くれるような痛みを伴いながらも、私の中には徐々に将のもので満たされていった。時間をかけて、ようやく全てが入りきると、将が申し訳なさそうな顔をして私の様子を窺うかがった。

「大丈夫か？ なわけないよな。本気で悪い」

「あやまりすぎだよ」

精一杯の虚勢で笑ってみせると、将の顔がほころんだ。言葉にすれば苦笑といったところだけど、それでも将が笑うのを見るのは久しぶりだ。

「将……」

「俺、だせーな」

いつもの口調。堪こえていた涙が頬を伝った。

「夏菜子？」

親指で不器用に涙を拭ぬぐってくれながら、将は心配そうな面持ちで私を覗き込んでくる。将に心配させるなんて、こうする意味がなくなっちゃう。それでも……

「嬉しいの。将が戻ってきたみたいで」

私が少しは役に立てたことも、将が私の心配をしてくれることも。好きな気持ちが増えてし

まう。増え続けた気持ちはどこへ行くのか、いつか救われるときが来るのか。

「そうか……こんなときに悪いけど、もう一つ最低なこと言ってもいいか？」

「なに？」

「動いてもいいか？」

私は笑って、また零れた涙を拭いた。涙が止まらないのは、笑いすぎてるせいなのか、別の感情のせいかな。深く考えないようにして、将に頷き返す。

会話が再びなくなっただけど、さっきまでよりも軽い雰囲気だ。将の背中に手を回すと、彼の肌は汗ばみ始めていた。受け身になっている私にはない熱さ。額に小さな汗の粒を浮かべている将が愛しいと思う。

「ん……いいっ……」

痛いばかりだったのが、いつの間にか気持ちよさに変わっていた。将を受け入れている。繋がっている。勘違いしてしまいそうな瞬間。でも、今だけ、恋人になったつもりになったら駄目？ 虚しくなるだけだとわかっていても止められなくなる。

「まさっ……るっ……」

「駄目だ……、出すぞ」

「うん……いいっ……よ」

激しさを失った将が覆いかぶさり、火照った肌が私の肌に触れる。もう、引き返すことはできない。なかつたことにもできない。私は自分で選んでしまった。だから、このまま進み続ける。

高校時代の終わりに切れてしまった将との繋がりが。成人式で再会し、再び手にした繋がりをもう失いたくない。

薄れそうになる意識の中で、私は将と再会してからのことを思い出していた。

一 成人式の再会

うっすらと雪が積もった白い景色の中、彩り豊かな着物を身に纏った人々が履き慣れない草履におぼつかない足取りで会場へと向かっている。駅からすぐの市民体育館には、新成人たちが集まっている。高校のときの同級生から連絡が来て、体育館の前で待ち合わせをしたけど、狙い澄ましたように降った雪のせいであたりは混乱していて、合流するのは難しそうだ。

高校を卒業した年には頻繁に会っていたのに、一年も過ぎると次第に連絡の間隔はあき、最後に会ったのは半年前になる。少し前に、雪で電車が遅れているから遅くなるとメールが来た。他にも何人かに声をかけていると言っていたが、携帯の番号もわからない友達と合流する手立てはない。

「あれ……？ 麻生さん？」

背後から呼びかけてきた声は男性のもの。今日初めて再会する知り合いにドキドキしながら振り返った。

「やっぱり。さっき、ちらっと見かけてそうかなって思ったんだけど。僕のことわかる？」

「もちろん。久高君でしょ」

すぐドキドキしていた。成人式のお知らせを受け取ってからずっと、もしかしたらアイツに会えるかもしれないと、心のどこかで期待していた。久高君と顔を合わせたことで、その期待が確信に変わる。高校時代、久高君とアイツはいつも一緒だったから。

「おいっ！ さる」

久高君が一步横に動くと、後ろからスーツにコートを羽織った男性が現れる。

「ほら、麻生さん」

久高君に言われて驚きの表情をしたアイツは、私を見て少し気まずそうな顔になった。私は顔には出さずに落胆した。最後に言葉を交わしてから、どれだけ経つただろう。記憶の中では制服姿だった彼が、少し大人びた顔になってスーツを着ている。やっぱり……これまで私が好きになった人で一番素敵かも。

木村将。私が片思いをして、振られた相手。そして、その後の恋愛にも影を落としてきた奴。

「馬子にも衣装じゃん」

ボソツと横を向いて呟いた一言。

「うるさい。さるもスーツで人間らしく見えるわよ」

反射的に言い返してしまった。昔のように、言葉がボンと出て、私自身も驚いている。だって、もう軽口を叩き合うことはないと思っていたから。

「おい、いい加減に『さる』はやめろよ。もう二十歳だぞ」

「なによ。二十歳になったって中身は全然変わってないじゃないのよ！ ちょっとは久高君を見習いなさい」

「それを言うならお前だって格好だけじゃねーかよ。隼人は昔っからおっさんくさいんだよ。そんなのを真似できるかってーの」

次々と強い口調で出てくる私の言葉。それに対してテンポよく返してくるさる。失ってしまったと思っていたものが、こんなにもあっさり戻ってきた。

「所詮、さるはサルよね。久高君、いくら幼馴染でもこんな低能といたら久高君まで汚染されちゃうわよ。縁切ったほうがいいって。ほら、成人式だし、ここは心機一転、新たな人間関係を築いて」

「うるさいバカナ。さるじゃなくて、将だ！」

久々に呼ばれるあだ名に腹立ちはない。失礼極まりない呼び方だけど、それが出てきたことがちよつと嬉しい。

「久高君だって、『さる』って呼んでるじゃないの」

「こいつは、小学生からの付き合いだぞ、今更直せないだろ。でも、お前には呼ばれたくない」

高校生の頃、将の後ろ二文字を取って『さる』と呼ばれていた。私もずっとそう呼び続けていた。身の軽さもサルそのもので、久高君と一緒にサッカー部に所属していたはずだ。

「じゃあ、なんて呼べばいいのよ」

「普通に将でいいよ」

下の名前で男性を呼ぶなんて、あまりしたことがない。本当に呼んでいいのか一瞬だけ悩んでし

まう。

「私もお前とか、バカナとか呼ばれたくないし、夏菜子でいいよ」

本当は『まさる』って呼びかけてみたい。でも言い出すキツカケが掴めない。下の名前で呼ぶだけなのに、らしくもなく緊張している。

「じゃあ、僕は夏菜子ちゃんがいい？」

今まで黙って、私たちのやりとりを見ていた久高君がふいにそう言って、私に笑顔を向けた。浮き足立っていた私は少し冷静になって、久高君の発言を意外に思いながらも頷いた。

高校時代に久高君が私以外の女子と喋っている姿はあまり見かけなかった。かといって、私と特別仲が良かったわけでもない。ただ単に私がさると仲がよかったからって理由だと思う。

「おいっ！ こいつに『ちゃん』なんて不要だろう！ 夏菜子で充分だ」

「うっさいわね。ずっとさるって呼ぶわよ。……将」

不自然だ。思いつきり不自然に名前を呼んだ。でも、今口にしておかないと、もうその呼び方はできない気がして必死だった。呼んでしまったことで急激に恥ずかしさが込み上げる。そして、さつき将が私を呼び捨てにしたことにも。

「ところで夏菜子ちゃんは一人なの？」

私の動揺を知ってか知らずか、一人冷静な久高君が質問を投げかけてくる。

「愛と……須藤^{あいで}って覚えてるかな？ と、待ち合わせしたんだけど、この雪でさ」

「覚えてるよ、須藤さん。仲よかつたもんね。僕たちはさるの両親に送ってきってもらったから平気

だったんだけど、電車組は大変みたいだね」

全く動いていないわけではないわけではないけど、雪の上に、成人式で人が多いせいか、いつも以上の混乱を招いているようだ。

「そろそろ式典始まるみたいだけど。須藤さんたちが来るまで僕たちと一緒にいる？」

心の中では何度も頷いていた。将との会話はケンカ腰だけど、まるで昔に戻ったみたいで嬉しい。バカみたいに言い合えることが、やっぱり楽しかった。

「夏菜子なんて放っておけよ。っていうか、式典参加すんのかよ。話なんか聞くのかわつたりーし」
久高君はともかく、将が市長の挨拶なんて大人しく聞いているとは思えない。

「外が晴れてればいいけど、朝方やんだばつかりの雪に曇り空じゃ、寒すぎる。体育館の中のほうが暖かいし、せつかく来たんだから式典に参加したほうがいいだろ」

いつも二人はこんな感じで、面倒くさがりの将を久高君が引っ張っていた。久高君は少し真面目で堅すぎるときもあるけど、二人はそれでバランスが取れている。

「今日は久々の面々に会うのを楽しむ日だろ」

「それは式典のあとでもできるし」

穏やかな久高君も付き合いの長さなのか、将には強く言うし、不思議と将を言い負かすときが多い。「そういうわけどう？」

私も将と一緒に、式典には出ずに久々に再会する友達と喋っているものだと思っていた。しかし、その友達とも合流できない今、寒さのせいで体はかなり冷えている。それに、足袋^{たび}の先が雪で濡れ

てしまって冷たい。

「邪魔じゃなければ、一緒でもいい？」

「邪魔、邪魔ー」

茶化すように言う将を久高君が一瞥した。将はすぐに口をつぐみ、視線を逸らして口を尖らせる。そんな将を久高君と二人で笑い、私は将と久高君の後ろについた。冗談を言い合いながら歩く姿は当時のままで変わっていないかった。でも、卒業から二年、大した成長はしていないはずなのに、不思議と背中が大きく見える。

会場に入ると、ほとんどの新成人が後ろの席に陣取り、自分たちの会話に花を咲かせている。なんとか見つけた三つ続きの空席は真ん中よりも少し前のほうだった。

久しぶりの再会を果たして、さらには将の隣に座っている。緊張しないわけがない。いつもより気合の入った化粧に加えて、館内の照明は舞台に集中してるから、赤くなった顔に気付かれる可能性は低いだろう。

実は、少し前にバイト仲間から告白されて、何度か一緒に出かけていた。まだお試し期間みたいな感じでハッキリと返事はしていない。将に告白をして振られて、その思いを引きずったまま二年が過ぎた。いい加減吹っ切るつもりで、バイト先の彼にOKと返事をしようと思っていたところだった。

でも、彼と一緒にいて、こんなにドキドキしたことはあった？ 思ったこと何でも彼に言えた？

恭しく始まった式典。ざわめきは多少小さくなったが、それでもおしゃべりはやまず、あちらこちらから小さな声で会話をしているのが聞こえてくる。隣に座る将も久高君と話をしている。

「女子って、今日集まったりするの？」

「んあ？」

暗がりに乗じて見つめていた将が急にこちらを向いたので、思わず女の子とは思えないような声を出してしまった。慌てて口を手で塞いでみたけど遅いよね……

「お前さー、そういう返事からしてガキだよな。まずはそのあたりから大人になる努力が必要だな」
「急に話しかけてくるほうが悪いんですよ」

あの返事は自分でもないとと思う。でも、大人になれと言われればカチンとくる。この辺が子供の証拠なのかもしれない。

「で、なんの話よ？」

上の空だったから、全然耳に入っていない。気付けば久高君もやや呆れた感じの笑みを浮かべていた。薄暗くてハッキリと見えるわけじゃないから、私の思い込みかもしれないけど。

「女子は同窓会みたいなのあるの？ って話だよ」

「ううん。特には聞いてないけど、集まれば、流利的に行くんじゃない？」

専門学校の友達は事前に同窓会の連絡があったみたいだけど、うちの高校はそういうのはなかった。でも、愛の性格を考えれば、会場で顔を合わせただけで終わりつてことはない気がする。多分、ゆつくりと話ができる場所に移動して、飲むなり食べるなりしようと言ひ出すはず。

「こっちはメールが来て、飲み会をしようって話になってるから、お前、女子に連絡しろよ」
「別にいいけど……」

予想外の展開に不機嫌そうに答えながらも、心の中ではガッツポーズをしていた。だって、将とはこの場で会って、それきりになると思ってた。だから、この隣に座れている時間を大切にしようとか考えて、じっくり観察までしていたのに。このあとも一緒にいられるなんて、連絡でもなんでもするよ。

急いで携帯を取り出すと薄暗がりの中、指先の感覚だけでメールを作成する。ディスプレイに表示される文字を見ながら、落ち着くように自分に言い聞かせ、文章が完成するとすぐに送信ボタンを押した。

「こっちは連絡したよ。多分、愛が女子の連絡先とか結構知ってるから、大丈夫だと思うけど」

「お前、友達いなそうだな」

「うるさいなあ。久高君とぼっかり一緒にいる将に言われたくないわよ」

べーっと舌を出して文句を言えば、将も似たような反応をしてくる。このバカっぽいやりとりすら楽しいと思うのはやっぱり好きだから、だよな。

愛から会場に着いたって内容と、飲み会はもちろんOKという返信がすぐに来た。何人もの挨拶に新成人代表のスピーチ。聞き流しながら、早く終わらないかと待ち遠しく思っていた。一時間ばかりの式典が全て終って、外に出ると、さきほどよりもさらに人が増えていた。私は愛に会うため、将と久高君は他の男子と会うため、一度別れることになった。

そのときにあとで連絡が取れるようになって、二人と連絡先の交換をした。私の携帯には未練がましく高校時代の将のアドレスが残っていて、新しい連絡先を登録した私はすぐにそれを消去した。

電車で遅れていた人も到着しただろうし、体育館にいた人も外に出た。ごった返すなか、愛はメールで言った銅像の前に四人の女子と一緒にいた。

「久しぶりっ！ って、あんまり変わってないじゃん。変わったのは着てるものだけ？ もー、電車混んで、足とか踏まれるし最悪だよ。こっちは着物で身動き一つするのも大変なのに、押されたりさー。あ、そうそう、みんなにメールしておいたよ。結構、集まりそうな感じ。で、男子って言い出したのは誰なの？」

愛は久しぶりとは思えないテンポのよさで一気に喋り出す。

「えっと、さる……将から言われたんだけど、将も別の男子から連絡が来たみたいな感じで、誰だか聞かなかったや」

「まー、誰でもいいよ。こんな機会だしさ。事前になんの企画もなかったから、当日に連絡が取れてラッキーじゃん。で、時間とかは？」

「それも聞いてない」

「駄目じゃん。せめて、場所と時間。ほら、すぐに確認して」

言われて、さっき入手したばかりの新しい将のメールアドレスを表示させた。これで、メールが届くんだよね。嘘みただけけど、本当だよな？ こんな気持ちはまだ自分の中にあっただのかと思いつつ、将のアドレスを眺めてしまう。高校時代と同じく、アルファベットの合間に顔文字みたいなの

のがあるアドレス。

私も真似して顔文字を入れたんだけど、将に気付かれるかな？　なんか、それで引きずってるのがばれるのも嫌だけど、全く気にされないのも寂しいな。

「ちよっと、手を動かさないとメールが打てるの？」

私の携帯を覗き込んできた愛は真つ白な本文を見て、ため息をついている。

「ほら、女子のほうはどどん返事来てるし、早くして」

「ごめん。急ぎます」

自分の世界に入り込んでいる場合じゃなかった。将にメールをすること自体、高校生のとき以来だから、どんな調子で書いていいのか、それすら悩んでしまう。結局のところ、素っ気ないままで端的なメールになってしまったけど、愛に急かされてそのまま送信した。

それが終わると、愛と一緒に来た女子と少し話をする。卒業以来顔を合わせていなかった子もいて、やっぱり高校時代の話題になる。話が盛り上がってきたところで、携帯の着信メロディが流れた。慌てて携帯を開けば、将からの電話だ。

取り落しそうになった携帯をしっかりと掴み直し、通話ボタンを押す。

「も、もしもしっ」

『なに俺の真似してアドレスに顔文字入れてんだよ』

「真似じゃないわよ。第一、将のと全く一緒ってわけじゃないし」

『まー、いいけどな。時間と場所、決まったぜ。あと、サッカー部の連中に会ってさあ、そっちの

メンバーも誘ったから』

男子のほうはクラス以外の人も合わせて、十人近くが集まっているらしい。集合時間と大体の場所を聞いて将との電話は終わった。その内容を愛に告げると、愛はすぐにメールをし始める。

「女子は何人ぐらい集まりそう？」

「んー、まだハッキリしてない。違うクラスの子も何人か来るけど大丈夫かな？」

「大丈夫でしょ。将もサッカー部のほうに声かけてたみたいだし」

愛は卒業後もママに連絡を取っていたみたいで、こうやって連絡の中心になってくれる。

「そっか、ならいつか。今のところは十二、三人かな」

その後、さらに女子が二人ほど合流したので、とりあえず近くのファミレスに向かった。お茶をしながら休憩をして、一度解散となる。

お母さんに連絡をして迎えに来てもらい、家で振袖を脱ぐ。解放感から下着姿のままカーペットにごろりと転がった。

「ちよっと、お父さんだっているんだから、そんな格好で寝転がらないでよ」

振袖を畳むお母さんを眺めながら、成人式であったことを頭の中でリプレイする。すぐに浮かぶのは少し精悍せいけんになった将の顔。文句を言う顔や、笑った顔など、いろいろな表情の将がぐるぐると巡ってゆく。

「もう、夏菜子。思い出し笑いなんかして気持ち悪いわよ」

「いいのー」

「なによ。成人式で初恋の彼にでも会った？」

「違うわよ！ そんなんじゃないの。ただ、久しぶりに高校時代の友達に会ったから楽しかっただけだよ」

まさかの凶星をお母さんにつかれて、私は慌てて言い訳を並べる。「ふうん」と返事をしたお母さんの顔が「知っているのよ」と言っているみたいで、私は居心地が悪くなった。

「着替えてくる」

「やっと、その気になったの。もー、本当にこれで成人したっていうんだから不思議よ」

今日のはなかと子供扱いをされる日だ。確かに自分の行いが大人かと問われれば、胸を張って大人です、とは言えない。それでも、少しずつ成長しているつもりではいる。三月には専門学校も卒業。これでも就職の内定だって取れてるし、無事にいけば春には晴れて社会人。

そういえば、将はこのあたりではかなりいいレベルの大学に進んだはず。久高君も一緒のはずだけど、あれだけサッカー馬鹿だったのに、大学に合格できちゃったんだから不思議だよなあ。私はとにかく勉強がしなくて、大学への進学は考えなかったけど。

飼っている犬の美容室にお母さんと一緒に通ううちに、私のやりたいことになっていったトリマーというお仕事。将はどんな仕事するのか？ 今日みたいのスーツを着て、働いてたりして……

なんか、さつきからずっと将のことばかり考えてる。クローゼットから洋服を引っ張り出して袖を通すと、すぐにリビングに戻った。またリビングでゴロゴロしたら文句を言われそうだけど、部屋は寒いしテレビが観られない。

「やっと着替えてきたわね」

お母さんは畳み終わった振袖を和紙っぽい袋にしまっていた。

「この着物って買ってもらって嬉しかったんだけど、また着ることってあるのかなあ？」

すぐ傍に座り込むと、お母さんから髪飾りの箱を渡され、テーブルに置きっぱなしにしてあった髪飾りを片付けてゆく。

「あるでしょう。夏菜子が結婚するまでは着られるわよ。それとも、もう結婚する相手でもいるの？」

「い、いないよ。まだ二十歳だよ。学生だよ。結婚なんて……」

ずっと黙ってテレビを見ていたお父さんがわざとらしく咳払いをするから、私は慌てて声をひそめる。

「ちよっと、お父さんがいる前でやめてよ」

「いいじゃない。どうせいつかお嫁に行くんだし。でも、その様子じゃ、付き合ってる相手もないんじゃないよ」

お母さんと恋愛の話なんて滅多にすることがない。今日のお母さんはちよっといつもと違う。

「その気になれば、彼氏だってできますー」

意地になって答えた瞬間、告白してきたバイト仲間が脳裏に浮かんだ。すっかり忘れていたけど、私が「うん」と言えば、彼氏、彼女の関係になれるんだよね。でも……そんな簡単でいいのかな。もっと、ドキドキとかワクワクとか、そういうのがあるべきじゃない……

「あら、そんな人がいたなんて初耳」

「いちいちお母さんに言うわけじゃない」

「まあね。でも、夏菜子の振袖姿を見てたら思い出しちゃった。お父さんと初めて会ったときのこと」振袖をしまったお母さんの表情は何かを懐かしんでいるようだ。私の振袖を通して別のものを見ているようにも見える。

そういえば、お母さんとお父さんの出逢いも成人式だったって聞いたことがある。知り合って二年で結婚して、すぐに私が生まれたはず。今まで、あまり詳しくは聞いたことがなかった。

「別に同じ中学とか高校だったわけじゃないんだよね？ どうして成人式で会ったの？」

再び、後ろでお父さんが咳払いをしたけど、そこは聞かえないふり。

「お父さんが飲んでいた缶コーヒーがお母さんの振袖にかかっちゃったの。それで、お父さんっちらすごい慌てちゃって」

くすくすと笑うお母さんは「母」ではなく、恋愛について語っている友達と同じ表情をしている。もう何十年も前のことなのに、こんなふうに思い出せるなんてちょっと羨ましいかな。

「今すぐ脱いでくださいって」

「え？」

思わず聞き返してしまった。お母さんは楽しそうに笑いながらお父さんをチラリと見る。

「それは……気が動転してたんだ」

耐え切れなくなったのか、ついにお父さんが口を挟んできた。

「すぐに染みを落とさないと駄目だと思って……」

こんなお父さん、見たことがない。頭ではわかっていたけど、お父さんとお母さんにも恋人同士だった時期があったんだよね。

着物のことなんかわからないお父さんはお母さんの家まで付いてきて、着物を弁償しようとしておばあちゃんに笑われたらしい。結局、クリーニング代でそのときは収まったけど、それから連絡を取り合うようになって、お付き合いが始まって結婚まで。

「結婚するって、何か確信みたいなのはあったの？」

「どうかね？ でもね。ぶつかってコーヒーがかかったときに、うろたえるお父さんを見て、この人とはまた会うなってなんとなく思ったの」

テレビを見ていたはずのお父さんは、新聞紙を広げてこっちは顔が見えないように隠れてしまっている。お父さんが照れている……？

「お母さんの振袖は親戚からのお下がりでっただけで、結局一度しか着なかったのよ。だから、夏菜子にはこの振袖をたくさん着てほしいわ。あ、でも花嫁姿を見られないのは寂しいから、適当なところでいい人を見つけて結婚してちょうだい」

「はーん」

着物は着ていると苦しいし、鼻緒ですれてしまつて足も痛い。でも、スーツやドレスとは違って身の引き締まる感じがした。

「私、着物、そんなに嫌いじゃないよ」

「あら、じゃあお友達の結婚式とかお正月とか、どんどん着てちょうだい。お母さんが着付けして

あげるから」

その昔、結婚式場の衣裳室いしよしつで働いていたお母さんは着物の着付けはもちろん、簡単なメイクもできる。だから、今日だってお母さんが着付けにメイクに髪までもやってくれた。

「お父さん、お母さん。着物、買ってくれてありがとう」
「どういたしまして」

にこりと微笑むお母さんに、お父さんの咳払いが一つ。

お母さんに、改めて髪型を整えてもらってから、自分の持っている服の中で一番気に入っているコーディネートを選び、二十歳のお祝いにと買ってもらったファー付きのコートを羽織った。

「じゃあ、行ってくるね」

「遅くなるのはしょうがないけど、帰りの時間は連絡を入れること」

「うん。わかった」

「飲みすぎるんじゃないぞ」

「はい」

お父さんとお母さんに見送られて、駅まで早足で向かった。時間がないわけじゃない。むしろ少し早すぎるぐらいの時間だ。でも、みんなに……というより、将に会えると思っただらじつとしていられなかった。

電車で二駅。電車から窓の外を見れば、すっかり日の落ちた街並みに、雪が埃や泥を含み茶色く

残っている。

雪の残る景色……。二年前の今頃も雪が降ってたよなあ。ほろ苦い思いが蘇よみがえる。それと同時に、将と再会したことで舞い上がっていた自分の滑稽こっけいさを思い知った。

「馬鹿だなあ。もう、振られてるんじゃない」

電車の中、小さな声で呟いた。

結構、待つんじゃないかと思っていたのに、集合場所には既に将を含めて数人が集まっていた。

「お、夏菜子はえーじゃん」

「げ、将が待ち合わせより早く来てるなんて……、もう雪は勘弁してよお」

「お前、それどういう意味だよ」

「そのまんま、あんたがまともな行動をすると天変地異てんぺんぢいが起こるって意味よ」

顔を合わせて早々に言い合いを始めると、将と同じサッカー部だった男子が口を挟んできた。

「お前ら、変わらねーな。ずっと、こんな調子で続いできたのかよ」

「続くもなにも、今日が卒業して以来初の顔合わせだよ」

「はあ？ なにそれ、二年ブランクがあっても、変わらないってどんだけだよ」

「そんな冷やかに周りの同級生たちも乗ってくる。」

「お前らって、そういえばいつも一緒にいたよなあ」

「三年間、同じクラスだっただけだろ。ただの腐れ縁だ」

高校時代、男女混合のグループを作るときは、大体将と久高君と一緒だった。将とは三年間。久

高君とは一年と三年のときに同じクラスになっている。

「腐れ縁」と言い切る将にチクリと胸が痛んだ。いつも近くにいて、気兼ねなく言い合って、一緒にいて楽だった。だから……

「そうそう、腐れ縁。私はサルの飼育係だったんだから」

「ふざけんな。いつ、俺がお前に飼育された？」

上手く笑えてるかな？ ちょっと自信がないけど、少しだけ泣きそうになった気持ちを隠すように明るく言う。

「うわ、懐かしいっ！ さると飼育係。まあ、確かに。暴走するさるをいつも麻生が追いかけてまわしてたよな」

そう。高校時代、私たちはサルと飼育員と押揃や揃されていた。

そんなやりとりをしているうちに一人、二人と人数が増え、まだ全員は集まっていないけど時間になったため居酒屋に移動した。

「それでは、みんなの成人と再会を祝して……乾杯っ！」

「かんばーい」

重なる乾杯の声に、グラスを合わせる音。今日は成人式とあって、店内には似たようなグループがたくさんいる。スタートに集まったのは十二人。これから、まだまだ増えるらしい。

久々の再会に最初はぎこちない雰囲気だったけど、空いてゆくジョッキの数に比例して、高校生頃の気軽さが戻ってくる。近況報告は就活や学校の話が多い。

「でもさあ、実際のところ、お前たちってさあ。高校のとき、付き合ってたの？」

ふいに振られた話題は唐突すぎて、私は上手く対応できなかった。顔が強ばってしまい、私たちの周りに変な静けさが訪れる。

「付き合ってたねーよ。こいつとは、どっちかというとも男友達の間違ったしな」

別の輪にいたはずの将が私の頭上から呆れたように言った。それで、私も取り繕うキツカケを掴む。「そうそう、どっちかというとも、人間じゃなかったし」

私も将の言い方に合わせて、冗談を口にする。それでも、手の平がじんわりと汗ばんだ。

「ふざけんなー」

「どっちがよ」

ジョッキを手にした将はドカリと私の隣に腰を降ろしてきた。再び、いつもの言い争いになる。なんだか変な感じがした。まるで他人のように自分を見ている私がついて、頭が空っぽのまま、口は勝手に将に文句を投げかけている。『男友達』。その言葉が重りのように心の奥にドンドン沈んでいき、息苦しくなる。苦しいはずなのに、私じゃない私はそのまま将と言い争いを続けている。まるでもう一度振られたみたい。わかっていたことなのに、ものすごくジョッキを受けている自分。

将にとって私は友達ではない。今も、昔も……

あれは二年前。登校する三年生の姿もまばらな一月。

「夏菜子は専門だったよね？」

「うん。愛は女子大生かあ。推薦取れて本当によかったね」

「本当だよー。もう、すごい緊張したんだよ」

「聞いた。聞いた」

センター試験も終わり、多くの生徒が本格的な入試を控えたこの時期。既に進路の決まっていた私と愛は教室の隅で話をしていた。

「でもさー。夏菜子は木村と付き合わないの？ 絶対、相思相愛だよねー」

「さると？ ないない。だって友達だよ。あいつとなんかありえないよ」

進路が決まれば、そんな話題も出てくる。誰と誰が付き合っていると、別の大学になったから別れるとか。さるとのこと、口では否定しながらも、実はずっと好きだったりしている。バカみたいに騒いで、なんだかんだで一緒に出かけたり。

もう部活は引退したけど、サッカー部関係の買物があれば一緒に付いていたり、ついでに映画を観たり。一緒に過ごした時間はどの女子よりもあると思っている。さるは久高君と同じ大学を志望していた。推薦で決まった久高君と違って、一般受験だからまだ決まっていない。でも、久高君が付きつきりて詰め込んだって言ってたから、多分大丈夫だと思っ。

入試の結果が発表されたら、私は言うんだ。だって、このまま卒業したら会う機会もなくなっちゃう。そうなる前に気持ちを伝える。

よく友達からも付き合ってるのかって聞かれたし、さるが聞かれているのを見かけたこともある。否定はしてきたけど、さるに嫌われてはいないと思う。告白して断られる可能性はもちろんあるけ

ど、何も言わずに後悔するぐらいなら、ハッキリと言うんだ。

進路が決まるまで悩んでたけど、専門学校に合格してから気持ちは固まった。三年間同じクラスだった、誰よりも仲のいい男子。周りに言われたからじゃない、多分一年の頃にはもう好きだった気がする……。ハッキリといつからなんて覚えていない。ただ、高校を卒業してからもずっと一緒にいられたらいいと思ってた。そう思うようになったのはここ最近だけ。クラス替えのたびに同じクラスになれたことに喜んで、バレンタインには義理とか言いながらチョコもあげたし。

もしかしたら、私の気持ちは気付かれてたりして？ それでもいい。ここまで来たら当たって砕ける。がんばれ私っ！

「さる！ ちょっといい？」

昼休み。クラスがざわついている中、変にこそそはせず、堂々とさるに声をかけた。

「あんだよ」

「ちょっと手伝ってほしいから来てよ」

どんなふう呼び出すかは結構考えた。面倒くさそうにしながらも席を立ったさるは廊下まで出て文句を言ってきた。それでも、ちゃんと来てくれるあたりが嬉しい。一月末。さるは無事に久高君と同じ大学に合格した。まずはお祝いからだよ。

「んだよー。さみーじゃん。外なら外って言えよ」

体育館に向かう連絡通路から脇に入り、体育館の裏に来た。積もるほどではなかったけど、午前

中には雪が降っていた。それだけ寒い日だから、外に人の気配はない。そして、今日の五限にこの体育館を使うクラスはない。それも下調べしてあった。

「ごめん。すぐ済む……と思うから」

すぐって、人生で初の告白をそんなお手軽に済ませてもいいのかな？ でも、だからだと喋るよりも、ストレートに好きって伝えたほうがいいよね。

「で？」

さるはブレザーの袖を引つ張って、その中に手を収めながら、寒さをしのぐように腕をさすっている。サッカーやってるくせに寒がりで、普段は少し猫背。三年間、いろんなさるを見てきた。多分、誰よりも。

「あのね。えーっと」

寒そうにしているし、言うことは決まっているのだから早くしよう。私の予定ではあまり重くならないように、さらっと言うつもりだったのに、いざとなるとなかなか大事な一言が出てこない。

「んだよ。こんなところに呼び出して、告白かよ」

笑いながら言うさるに私はびっくりして、まじまじとさるのほうを見てしまった。その口ぶりからして冗談のつもりで言っているんだろうけど、まさか相手から今からすることを指摘されるなんて想定外。

「実は、そうなのっ！」

えーいつ、ここは度胸と勢いだ。このまま言っちゃえ。

「好きなの！」

体を心臓が走りまわっているみたいに、全身がドクドクしている。本当なら地面でも見ていたかったけど、そうしてしまったら気持ちで負けているみたいなのがして、必死にさるの顔を見た。

「おい、おい。卒業間近のドッキリかよ。その辺にクラスの奴とか隠れてるんじゃないかねーの？」

いつもの軽い口調で顔をキョロキョロと巡らせるけど、さるの目は泳いでいて、いつもとわずかに様子が違う。

私の一世一代の初告白を、なんでクラスの奴の笑いのネタにしなくちゃいけないのよ。

「違う。本当なの。私、ずっとさるのこと好きだったの」

瞬きをしたさるの表情から笑いが消え、少しずつ狼狽へと変化していく。どうしよう、これはあんまりいい反応じゃないよね？ もっと押す？ それとも黙ってる？ ぐるぐると頭の中にいろいろな考えが浮かぶけど、どれも実行できない。

小さく「マジかよ」ってさるの声が聞こえた。嬉しいっていうよりも、困っている声音。

「駄目……かな？」

耐えきれない。さるの反応を見ているのも辛くて、我慢ができずに問いかけてしまった。だって、昼休みだつて終わっちゃうし、中途半端な状態で放課後に持ち越しながら絶対に無理。

「駄目っていうか……。俺、お前のこと……友達としてしか見れない」

ものすごく申し訳なさそうで、こっちが謝りたくなってしまふような態度だった。いつものふてぶてしいさるはいない。ちゃんと真面目に答えようとしてくれるのは嬉しいけど、無視するわけに

はいかない言葉を聞いた。『友達』。それは、彼女になるには足りない関係。

「じゃあ、友達からでもいいから」

「もう友達じゃん」

冷静な突っ込みに思わず頭をかく。

「そっか、そうだよね。私、何言ってるんだろう。結構、テンパってるかも。あっ！　じゃあ、えつとまずは二人で出かけてみたりは？」

「別にそれも今までもあったし、違いがわかんねーよ」

「だよね」

さらに追い詰められる私。あまり考えていなかった。私とさるは今でも友達で、予定が合えば別に二人きりでも出かける関係で、でもそこに恋愛は絡まなくて。じゃあ、付き合ったらどう変わるの？

「友達じゃ駄目なのか？」

今更ながら、付き合うってことがわからなくなってくる。いや、もし付き合えたらとかいろんな想像とか妄想とかあったんだけど……あったはずなのに、今は頭が真っ白になって思い出せない。

「さるは……一度も私のこと女として見たことないの？」

質問に質問返し。今の状況ならば、友達でいようって戻れる。でも、口は勝手にきわどいことを聞いてしまった。

「……」

俯うつむいて、じつと考え込むさるに驚く。会話の流れからして「ない」って返答が来るものだと思っていた。なのに考え込んでるってことは、女として見ていたときがあったってこと？　それって、もしかしてチャンス？　可能性ゼロじゃないってことかな。

「あんま、期待させること言いたくねーんだけど」

小難しそうな顔をして、さるは私のほうを見てきた。申し訳なさを浮かべている目に、高揚しかけていた気持ちが沈み始める。この先のさるの発言はあんまり喜べない。そんな気がする。

「ぶっちゃけ、俺二年のときにお前のこと……ちよつと気になってた。好きとかわかんないけど、多分好きだった」

それって、もしかして去年告白してたらOKだったってこと？　そのときは両思いだったってことじゃん。

「え、待って。じゃあ、今は？」

さつきから混乱しっぱなしで、思考回路が全く働かなくなっちゃった。

「今は……友達」

ガクリと肩を落とす。去年は友達以上の感情があったはずなのに、今は友達でしかない。それって、本当に希望はないの？

「なんで今は友達なの？」

それを聞かずに納得なんてしない。してやるものか！

「好きかかって思ったんだけど、それを言わなくても、普通に一緒に出かけてたし、好きとかそう

いう感情に振り回されなくなかったっていうか」

それは私も思った。だけどさ、恋愛の醍醐味^{だぼみ}って、相手の言動に一喜一憂したり、そういうものじゃないの？

「俺、認めたくねーけど、多分ガキなんだよ。だから、そういうのよりも一緒にいてワイワイ騒いでるほうが楽っていうか」

がんばれば届きそうな気持ちちがもどかしい。

「でも、やっつてることは変わらないとしても、気持ちの繋がりとか、一緒にいるときの安心感とかさ」
必死に『お付き合い』のいいところを探そうとするけど、まだ一度も誰かと付き合い合ったことのない私には説得力のある言葉を見つけれない。案の定、さるはピンとこないようだ。

「去年、もしかして、お前も俺のこと好きなんじゃないかって思ったりしたんだけど……」

「だけど？」

なんて心臓に悪いんだろう。諦めたらいいのか、もう少し粘ってがんばればいいのか、全然見当がつかないよ。思わせぶりなさるの言動。でも冷めている表情。

「怒んなよ」

少し怯^{おび}えた様子で、私を窺^{うかが}ってくるから、できるだけ普通の顔をして頷いた。

「……なんか面倒になった」

もう一度がっくりと肩を落とす。

「高校生だよ。もうすぐ卒業だよ。今って青春のど真ん中だよ。それなのに恋愛が面倒って……も

う、いいっ！ 忘れてよ。私^{わたし}がここに来てから言ったこと全部忘れて」

「だから、怒るなって……」

「怒ってないよっ！」

怒鳴り返している時点で怒っていないって言う自分に矛盾を感じたけど、冷静でいられる状態ではなかった。考えたらわかる。さるは私の言ったことに対して、さるなりにちゃんと答えてくれたんだ。そうだよ、完全に私の逆切れだよ。振られたことに対してのね。

「ごめん、先に教室戻る」

ここで涙の一つでも流せば可愛い女の子になれたのかもしれない。でも、大股でドカドカと歩く私は全く可愛くない。これじゃあ、いくら付き合いが長かったってダメだよな。

振り向いて確認することはできないけど、多分さるは困っていると思う。一晩寝たら、私もちょっと落ち着くだろう。明日にはいつもの私に戻る。

私が教室に戻って少し経ってから、さるも戻ってきた。この日、学校にいる間、さるとは目も合わせられなかったし、会話もできなかった。それはさるも同じで、私の様子を見てわざとタイミン^{タイミング}グをずらしているように思えた。

家に帰って、布団にもぐると一人で反省をした。さるはまだ恋愛よりも友達と遊んだりするほうが楽しいってことなんだ。なら、今日のことは水に流して普通に友達として付き合い合っていけばいい。それで、いつかさるが恋愛をしたくなったらときに、さりげなくアピール。うん、これでいいじゃん。単純な私は自分がさるにとった態度も忘れて、スッキリしてから眠りに就いた。まさか、あれが

最後の会話になるなんて思いもせずに。

翌日、少し緊張しながら教室に入り、できるだけいつもと同じ調子でさるに挨拶をしようとしたら、私が入ると同じタイミングで、さるは別のドアから教室を出ていってしまった。

たまたまだと思っていたのに、一日中そんな感じ。さるの席へ近づこうとすれば、急に近くのクラスメイトと喋り出したり。

いくら鈍感な私でも気付く。私、さるに避けられてる。目を逸らされて、視線を合わせることも叶わない。まさか、こんなことになるとは。いや、振られたらそうなるかもって思ってたはいたけど、二年のときには友達以上の感情があって、今は友達の間がいいって言ってたから、そのまま友達に戻れると思ってた。

諦めの悪い私は、少しの間のことならば仕方がないと待つことにした。いくらなんでも、卒業まで口をきかないわけじゃないだろうし、今、私から無理に行けば余計に逃げられちゃいそうだし。

少し時間が経てば今までと変わらない一日が来て、さるや久高君と冗談を言い合って、卒業までの短い時間を過ごせるものだと思ってた。さると久高君は地元の大学だし、卒業してからも会おうと思えば会える距離。だから、友達として一緒に遊んだり、そんな関係がずっと続くんだって。

卒業式の日。一度だけ、さると目が合った。何かを言いかけたさるは迷いを見せてから目を逸らした。それが最後。久高君は何かあったのかとしきりに心配してくれたけど、言えるわけがない。

告白をして振られて避けられているなんて。女子ならまだしも、さるの幼馴染に、そんなこと言え

ない。言葉を濁して、久高君と別れの言葉を交わした。

告白なんてするんじゃないやなかった。友達のままでもよかったのに、余計なこととして関係を壊しちゃった。友達なら今頃、一緒に卒業だって騒いでいたかもしれない。時間を巻き戻したいって後悔ばかりの卒業式。

「もう、そんなら、今からでも付き合っちゃえよ。二年も経てばお互い変わってるだろう？」

回想と現実が入り混じる。昔もそうやってよくからかわれた。大げさに否定しながら、心ではそうなることを願っていた。そして、今は……。そう、成人式が終わってから集まって、飲みに来ていたんだって。

「それこそ、残念でした。俺、彼女いるし」

決定打。滅多打ち。完敗。気付いちゃった。私ってば期待してたんだ。二年も経てば気持ちが変わってるんじゃないかって。あんなことがあったのに、今日は昔と変わらずに接してくれたから。もしかしたらって、頭のどこかで期待してた。

「わ、私だって、告白されてるし。多分、付き合うし」

「はは、よかったじゃん」

そう言った将のほうを見てしまった。ほんの一瞬だったけど、ほっとしたような顔をしていた。今でも私が将を好きだったらどうしようって思ってたのかな。そのとおりだったんだけど、やっぱり困るよね。彼女いるんだし……

「そうよ。私の魅力に気付かないような男に用はないわよ」

あまりきつい口調にならないように気をつけて、それでいて将を安心させるようにきっぱりと告げた。安堵と少し傷付いたような将の顔……。卑怯だな。いや、私が勝手なだけか。

でも、これでよかつたんだよ。いくらなんでも引きずりすぎだよ。将にだって彼女がいるんだし、私だって、いい加減すつぱり忘れないといけなかつたんだよ。だから、今日会えて本当に……よかつた……

それから、結構な勢いでチューハイを飲んだ気がする。まだ、自分の限界がわかるほどお酒を飲んだことはないのに、飲まないかと将と同じ場にいられない気がした。

「夏菜子ってお酒強いのか？」

隣に座った愛にそう聞かれた頃には、私の意識は大分怪しくなっていた。ちゃんと、誰とどんな会話をしたかも覚えているし、まだ自力で家に帰れるとは思う。だけど、多分今までで一番お酒を飲んでいる気がする。いや、間違はなく今日が最高記録。私って何気にお酒に強いのかな？

「そろそろ、このお店出るけど、夏菜子は二次会どうする？」

「私、あんまり遅くなると親が心配するから。そろそろ帰るよ。愛は？」

「私は気楽な一人暮らし。その上、ここから近いから、とことん行くよ」

愛はそんなにお酒に強くないからと控えめに飲んでた。でも、飲み会の雰囲気は大好きと言うだけあって、ベロベロになつてる男子と肩を組みながら歌ったりとノリがいい。

「もう成人したつていうのに、親の心配なんて夏菜子らしい。帰り、誰か男子つけようか？」

「ううん。平気。家に帰れるぐらいの意識はあるから」

笑ってみせると、愛はそれ以上は言わずに、テキパキとお金の徴収を始める。本当は親が心配するなんてことはない。遅くなつてもいいつて許可が出てたぐらいだし。でも今日は打ちのめされた気分で、これ以上将の顔を見ているのが辛かつた。

「じゃあ、今日は楽しかつたよ」

「おう、今度は誰かに同窓会企画してもらわないとな」

駅で別れの言葉を交わし、二次会組と帰宅組はそこで別れた。本当は電車なのに、私はコンビニに寄りたいからと嘘をついて、帰宅組とも別れる。

一人になりたかつた。人に合わせて会話をするのも限界だつた。家まで二駅。歩くと四十分。結構な距離だけど、なんだか歩きたい気分だつた。

駅前の賑やかさが徐々に住宅街の静けさへと変わる。静かな道を歩きながら、自分の吐き出す白い息を眺め、空を見上げた。空気の澄んでいる冬はよく星が見える。だけど、今日は満月の明かりが強くて、少し星が少ない気がした。

「明るすぎだよ、月……」

空に向かつて声と白い息を零すと、つーつと頬を雫が伝つた。鼻をすすると、つーんとした痛みが走る。

「はは、泣いてる。二年越しで振られてやんの」

自嘲の言葉を呟くと、さらに涙腺が緩んだのか、一気に涙が溢れ出した。バッグからミニタオル

を出して涙を拭う。でも、拭うと次の涙が溢れる。

もう、これで将への気持ちちは区切りがついた。今は悲しいけど、いいじゃん。これで私も前に進めるんだよ。彼氏を作ったことがないからいいじゃないんだよね。バイトに行ったら返事をするんだ。それで付き合ってみればいいんだよ。

やっぱり、失恋には新しい恋だよ。ドキドキやワクワクは付き合ってから来るかもしれないんだし、まずは進もう。

そう心に誓い、寒空を見上げて、私は結局ずっと泣きながら家まで歩いた。

二 新しい関係

専門学校の卒業式も終わり、社会人になる直前の春休み。いろいろと準備を進めてはいても、働き始めることへの実感はないまま四月に入ろうとしていたとき、意外な人物からメールが届いた。

『この前、二次会で夏菜子ちゃんの就職の話を聞きました。就職祝いに飲みに行かない？ もちろんおごるよ』

送信者は久高君で、最後に将の名前も入っていた。メールの内容を素直に受けとめるならば、久高君と将と私の三人で飲みに行くことになる。そんなの、将の彼女は許すのだろうか？

早々に彼氏と別れてしまった私は、恋人というものをいまひとつ理解できていない。一緒にいて

感じた違和感。何かが違うという思いが日々大きくなっていつか、彼が見せてくれる好意すら苦しくなってしまった。結局一ヶ月後、私の初めてのお付き合いは初エッチの日に終わりを告げた。いつか、違和感がなくなつて、一緒にいることが自然になつて、好きだと思える日が来ると思っていたのに。

告白をされたことで浮かれた気持ちもあつたんだろう、いつか彼に対しての気持ちが芽生えるんじゃないかという期待もあつた。でも彼を好きになれないと悟つた途端、急に彼の好意が怖くなつてしまった。将を忘れるために彼を利用してしまったという罪悪感。時間をかけてみようよと、何度も言われたけど、私は一方的に逃げ出した。そのとき、頭に浮かんだのは……

散々、悩んだ挙句、私は久高君の誘いを受けることにした。将のことをふつきたのかどうかはわからない。ただ、なんとなく大丈夫な気がしたのだ。

その予感、当たったことになるのかな。お祝いをしてくれる二人とお酒を飲みつつ、会話の端々に出る将の彼女の話も聞いてもそれほど胸が痛まなかった。すんなりとは言えないけど、受け入れている自分がいた。今時っぽい付き合いっていうとおばさん臭いけど、将とその彼女はけっこう気軽な付き合いをしている印象だった。でも、楽しそうにしているのはわかった。

将の彼女は、自分も将以外の男の子と遊びに行くことがあるから、将が他の女の子と会うことも変に隠したりしなければそれほど気にしないらしい。私には理解できない。でも、私のそういう頭の固さが彼氏のできない原因なんじゃないかと思ってしまう。

久高君は高校時代と同様、女性が苦手らしく、大学でも特に女友達を作らず、彼女が欲しいとい

う気も起きないらしい。将よりもしつかりしていて、顔も悪くないのにもったいないって思ったけど、私の言うことじゃない。

変に馬が合うというか、将と久高君と一緒に過ごす時間は気兼ねもいらず、あつという間に過ぎていった。

結局、二人とは飲み友達みたいな関係になり、就職してからもたまに昼間遊んだり、夜に居酒屋で会ったりしていた。

「それにしても、毎回お前の顔見てもなあ。誰か可愛い子でも連れてこいよ」

「彼女持ちのくせに随分なこと言うじゃない。彼女にチクるわよ」

将の彼女の連絡先なんて知らないからそんなことできるはずもないけれど、文句の一つも言いたくなる。どうにも言動が軽薄なんだよなあ。将の彼女になるには、相当大きな心を持ってないと無理っぽい。

「言うぐらい、いーじゃねーかよ。お互いに楽しければいいんだし。彼女と一緒にいる時間はちゃんと取ってるんだぜ。それ以外のところは口を挟まないのが暗黙の了解」

「そういうのが私には理解できない」

「それに関しては僕も同じ」

「ほらー!」

いつもの会話のパターン。私が将の理解できないところを指摘すると、さりげなく久高君がそれ

に同意する。そして、将は……

「はいはい。俺が悪かったよーだ」

一人むくれてお酒を頼む。私と久高君は笑って、その場は収まる。

「でも、二人に会わせてみたい子がいるんだ。うちのお店と一緒に入った子なんだけど、私とは違って、ちょっとセクシー系でね、中身は男らしいの。一緒にいて飽きないっていうか」

うちのお店には私以外にももう一人、今年の新卒採用として入っている。最初に向こうから声をかけてくれて、それから短い間にいろいろと喋るようになった。見た目はとてもおしゃれでキレイなのに、性格はサバサバとしていて本当に男っぽい。ズバツと言いたいところが羨ましい。

「いーじゃん! 巨乳ちゃん? 俺大好き。ウエルカム! なあ、隼人」

むくれた状態から瞬時に復活すると将は身を乗り出す。それから久高君の肩を抱いて同意を促した。

「そうだな。巨乳とかは置いておいて、夏菜子ちゃんと馬の合う友達っていうなら会ってみたいかな」

「今度誘ってみるよ。多分、来てくれると思うから」

「俺はその日を楽しみに日々を過ごすさ」

将と久高君と私。三人での飲み会に私の同僚、三島咲季みしまが加わったのは、それから一ヶ月もしないうちだった。声をかけたら二つ返事で頷いてくれたので、お互い仕事の都合のいい日を決めて、学生の将と久高君にはこっこの都合に合わせてもらった。

「どうもー、夏菜子と同じお店の三島咲季です」

「どうもおー！ 俺は木村将。将って呼んでね」

ノリのいい咲季は顔を合わせるなり、すぐに自己紹介をした。その調子に合わせて将も頭の軽そうな自己紹介をする。

「久高です。久高隼人。夏菜子ちゃんとは高校時代からの友達。さるとは小学校からの腐れ縁」

「え？ 本当にさるって呼ばれてるの？」

クスクスと咲季が笑うと将は必死に言い訳する。

「それは、学生時代のあだ名で、って今でも学生だけけど……。とにかく、今はさるって呼ぶのは隼人だけだから、咲季ちゃんはずいとも将って呼んでね」

こんな性格だったのかと思うぐらいの軽い調子に私は呆れてしまう。さすがに慣れているのか、久高君は気にした様子もない。

「えー、いいじゃない。私はさる君って呼ばせてもらうわ」

半分、将の反応を楽しんでいるのだろう、咲季は『さる君』と連呼する。その呼び方がかなり気に入ってしまったみたいだ。

「じゃあ、もういいよお。さるでも」

「なんか、夏菜子から話を聞いて、楽しそうな感じだと思ってたけど、本当に面白いわね。さる君の軽さと隼人君の落ち着き具合のバランスが」

今日初めて会って、少し会話をしただけなのに、的を射た意見で思わず頷いてしまった。自分の友達同士を会わせるなんて初めてで、どうなることかと少し緊張していたのに、私の心配などいらないほどに会話は弾む。

といっても、主に喋^{しゃべ}っているのは将と咲季の二人。将のおバカな発言に対して鋭すぎる咲季の突っ込みのおかげで、腹筋が筋肉痛になるほど笑った。結局、この日は零時過ぎまで飲み続け、そのあとカラオケに移動して朝まで遊び歩き、私はほとんど寝ずに仕事へ向かうハメになった。

そんな付き合いが一年も続くと、まるで咲季までもが高校時代からの友達のように馴染み、春になればお花見をして騒ぎ、夏にはデイキャンプに花火、秋には紅葉^{もみじ}狩り、冬にはスノーボードへ行^いった。

目の前に海。あちらこちらにカラフルなパラソルが立つ。そんな一つのパラソルの下で、海に濡れた体を乾かしながら、かき氷を手にする私たち。

「俺もあんまり人のことは言えないんだけどさあ。咲季ちゃんもあんまり彼氏と長続きしないほう？」

「んー、一緒にされるのは心外だけど、まあそうねえ。合わないと思つたら、もう駄目」

この就職難のご時世、大学生は大変な時期なんじゃないかと思うのだけど、将も久高君も付き合いはよかった。どうやら久高君のほうは去年の冬に内定をもらっていて、将のほうもほぼ決まっているらしい。二人とも優秀なほうなのかもしれない。

そんな大学生の二人と、海に遊びに来ていた。

「夏菜子も二十二歳。例の彼と別れてから、浮いた話を聞かぬーな」

「私はあんたと違って、そんなにほいほい軽く付き合えるわけじゃないのよ」

成人式のあとに付き合った彼のことを未だに言われてしまう。でも、一ヶ月で別れたということ、将と久高君には言えなかった。咲季を二人に紹介したときにも、まだ彼氏がいることにしてもらっていた。しばらくしてから、いい加減、彼氏がいるふりをするのに疲れて、別れたことにしたけど、それから新しい恋は訪れていない。

「俺だって、軽く付き合ってるわけじゃねーよ。付き合うときには、こいつとずっと一緒にいるってつもりで付き合い始めるんだからさあ。なあ、咲季ちゃん」

「だから、さる君と一緒にしないでくれる。……まあ、確かに最初から別れるつもりでは付き合い合わないけどね。夏菜子は慎重すぎると思うわよ。付き合いしてみないとわからないことだってあるし、絶対大丈夫なんて保証はどこにもないんだから」

彼氏と別れたと伝えてから、妙に将は彼氏を作れとうるさく言ってくる。ものすごい未練があるわけではないけど、ひっそりと将を思っている気持ちが私の中に残っている。それを感じて遠回しに牽制けんせいしているのではないかと疑ってしまうほど。

将と咲季は付き合いに對する考えが似ているようだ。咲季はあまり認めたがらないけど、将は咲季のことを同類だと思っているらしい。そんなやりとりを見ていて、羨ましいうらやましいと思うけど、だからといって二人のように恋愛に積極的にはなれない。

「よし。じゃあ、今度、咲季ちゃんが彼氏とお別れしたら俺と付き合い合わない？」

私と咲季の会話を将が口を挟んできた。似ている二人だけど、二人が同じ時期に恋人がいなかったことは今までにはない。

「その前に、さる君に新しい彼女ができてそうじゃない」

将は真剣に考え込み、小さく唸り声を上げる。本気で悩むところなのかと突っ込みたくなるが、そういう性格だから仕方がない。

「確かに。咲季ちゃんが今の彼氏と長く続くとは思わないけど、その前に俺が運命の人と出会う確率のほうが高いっ！」

私と久高君は同時にため息をつき、咲季は楽しそうな笑みを浮かべる。

「やっぱりね。だって、私と一緒にすることは、一人でいることが寂しくて耐えられないでしょ。多分、すぐにでも次の彼女を作らなう。いっせ、さる君が夏菜子と付き合いええ。見た感じ、お似合いよ」

「やめてよ、咲季！ 私はさるの飼育係なんてゴメンなんだから」

いつになく棘とげのある言い方になってしまったことに自分で驚いた。

「私は……好きな人ぐらい自分で見つけられるもん」

「まあ、夏菜子ちゃんがその気になれば、自分で動けるからご心配なくってところだね」

私の一言で変な空気がなくなったところを久高君が上手い具合にフォローしてくれた。心の中で大きなため息を零し、反省をしつつ、久高君をちらりと見る。大丈夫だよって言ってくれるようなウインクに私はペコリと頭を下げた。

「さーと、かき氷も食べ終わったし、もうひと泳ぎしようよ」

「賛成っ！ 俺は焼く！ こんがりと美味しそうならいに焼く！」

パーカーを脱ぎ捨てると、誰よりも先に将は海に向かって走り出した。その様子を私たち三人はのんびりと眺める。

「あいつ、彼女に最近振られたばかりでちよつと寂しいんだよ。変なことばっかり言ってるけど許してやって」

久高君は静かな口調でそんなことを教えてくれた。彼女と別れたという話は将が自分でしていたから知っている。いつもの調子で喋しゃべっていたからあまり気にしていなかったけど、それなりにへこんでいるのか。

海に飛び込んだ将。一人で波に向かっていく後ろ姿。無邪気で子供みたいな将がこれから社会に出て、どう変わっていくのか。就職はしたけれど、あまり変わらない私。私はいつ大人になるんだろう。いつ、将から卒業できるんだろう……

この四人の学生みたいな付き合いはいつまで続くんだろう。永遠に続くとは思えない。来年には、将も久高君も社会人だ。今までみたいに私たちの都合に合わせてもいられなくなる。そうなればやっぱり、遊ぶ機会も減るだろう。それでも、できるだけ長く、付き合いが続けばいいと思う。

冬が近づき、卒論に忙しくなる二人。それに、いつまで新入気分で仕事をしていられなくなってきた私と咲季。それぞれに少しずつ状況が変わり始めていた。

久高君は結構な大手企業に就職が決まり、将も地元で手広くやっている企業に就職した。そして、少し落ちついてきた六月。久しぶりに四人の都合が合って、将と久高君の就職祝いをするために集まることになった。

「就職おめでとうっ！」

「ありがとうー！ これで俺も社会人の仲間入り！ って言っても全然実感ねーわー」

「あんた、社会人になったなら、その学生っぽいバカな喋り方をまず直したほうがいいわよ」

「あー、それ注意されたわ。つい『わかったっす』とか言っちゃうんだけどさあ。研修の先輩がちょー厳しいの」

怒られたと言いながらも、相変わらずだらしのない喋り方をする将を見ると、思わず採用した会社に同情したくなってしまふ。

「久高君のほうは研修とか厳しいの？」

「うーん。研修が三ヶ月あって、まだ一ヶ月残ってるからね。あんまり、就職した感じがしない。授業の延長みたいで、講習が多いからさ」

みっちり三ヶ月もの講習というのは想像もつかない。私だったら確実に居眠りをしてしまいそうな気がする。

「そっか、じゃあゆつくりできるのは今のうちだけかな？」

「どうかな。でも今更だけど、夏菜子ちゃんや咲季ちゃんのことをちよつと尊敬したよ。働くって大変なことだって、まだまだな段階なのに思ったからね」

久高君みたいな真面目な人は仕事場で使えるようになればさぞ重宝されるだろう。バリバリ仕事をやっていく姿が想像できる。

「それは俺も思った！ だって、夏菜子も咲季ちゃんも俺らと同じノリで遊んだり飲んでたりしてたじゃん。そういうもんだと思ってたけど、会社って行くだけで何をしないで疲れるから不思議だよ」

将の感想に突っ込みもしたけど、結局怒りの言葉はため息となって零れた。私たちがそう見せていたとはいえ、働くことを随分と軽く見ていたことにガツクリしてしまう。

「私たちだって、二年経ったけどまだまだだもん。たった二ヶ月で理解されても嫌だけど、働くのってやっぱり大変だよ」

去年は新卒の採用がなく、今年になってようやく私たちにも後輩ができた。仕事もだいぶこなせるようになったけど、それでも、同じ職場で働き続けることの難しさを感じている。辞めることは簡単なのに、続けることは難しい。

「そうそう。新人が来たっていつても、未だに怒られることとかあるしさー」

私が恵まれているのは気の合う同僚がいること。咲季と一緒に仕事の愚痴を言ったり、苦労話をしたり、時にはお互いの意見をぶつけあったり。咲季がいなければ、すぐに折れていたかもしれない。

「あー、でもね。俺、今、一生懸命になつてることがあんだよ」

「どうせ、女の子絡みでしょう」

「うっ……悔しいけど、当たり前だよ」

将がテンションを上げて喋ることなどたかが知れている。

「今、超いい感じ。俺にしては結構、慎重に距離を縮めてるところ。俺、今回運命感してるんだよねー」
目からハートが飛び出てきそうな乙女チックな仕草をする将に、私と久高君はやれやれといった表情をしてしまう。

「でも、学生時代の付き合い合いと働いてからの付き合い合いて違うわよ」

咲季が脅すような口調で言えば、ガラにもなく将が表情を引きしめた。

「やっぱり違うか？ でもさあ、多分この子だっ！ ってのを感じちゃったんだ」

確か、前の彼女のときもそんなことを言って、たった一月で振られていた。好きになるときはいつでも本気なのはなんとなくわかる。けど、せっかく実った恋があまり続かない原因をゆっくり考えたりはしないらしい。

「麻里ちゃんっていうんだけど、もうねー、芸能人みたいな顔してて、めっちゃ性格が可愛いのに」

「うわー。それ危険。そういう子に限って、結構裏の顔があったりするんじゃない？」

「ないない！ 麻里ちゃんに限ってそんなことはない」

「そんなこと言って、過去に騙されてたことあったよな？」

熱っぽく語る将に久高君の一言。一瞬、顔をひきつらせた将はそれでもめげずに、ぐっとこぶしを握り、高く掲げた。

「俺は今まで経験を積んで、女の子を見る目を養ってきたんだよ。それはきつと、麻里ちゃんと出会ったためだった。過去の彼女たちには申し訳ないけど、全ては麻里ちゃんのため！」

付き合ってもいない相手にそこまで言えてしまう勢いはどこから出てくるのか。私にはないその勢いがやっぱり羨ましい。いつまでも一步を踏み出せずにいる私。

「じゃあ、麻里ちゃんと上手くいった暁にはここに連れてきてよね」

「おうよ！ 上手くいったらいくらでも紹介してやる。でも、俺らのアツアツぶりに嫉妬するなよ」

「はいはい。もう、寝言は寝てから。まずは付き合ってから戯言は言いな」

「ははあ。夏菜子つてば彼氏ができないもんだから、ツンツンしちゃうって。お前も本気で誰かを好きになつてみるって。二十三にもなつて、一人身は寂しいぞ」

「余計なお世話です」

私が一言で終わらせると、浮かれた将は麻里ちゃんとやらの話を勝手に続ける。お天気おねえさんにそっくりで同期の中では一番可愛い。そんな子が自分に気があると本気で思っているらしい。

会ったことも見たこともない麻里ちゃんが嫌な奴ならいいのについて心の中で毒づいて、私は自分の心の狭さのために息を漏らす。

「あー、夏菜子のそういう態度がマジでむかつく。見てろよ。ぜつてー連れてきてやる」

私のため息を勝手に勘違いして、将は余計に燃え上がる。そこまでレベルの高い子が将なんかになびくわけがない。もし付き合つたとしても、いつものようにすぐに別れてしまうだろう。そう踏んでいるのは私だけじゃなかったのに――

就職一年を無事に過ぎた春、将は本当に麻里ちゃんを連れてきた。

「こちら、川崎麻里ちゃん。俺の彼女です」

ペコリと頭を下げた麻里ちゃんはものすごく緊張した面持ちで、怯えているようにも見えた。

「短大卒で二こ下。お前らしいめるなよ」

俺のだ、と言わんばかりに肩を抱き寄せ、誇らしげな顔をする将に、私たち三人は言葉もなく、目の前の二人を眺めていた。

「あれから話を聞かないから、とつくに駄目だったのかと思つた」

ぼそりと咲季が呟くと、チツチツチツと人さし指を振りながら将は首を横に振る。

「散々、バカにされたからな。お前たちをビククリさせようと思つて、その後の話は一切してなかったのさ。しかも、すぐに別れるとか言われるのも癪だったから、付き合つてからも落ち着くまで黙つてた」

今までにない将の行動にさらに驚いてしまう。それだけ本氣つてことなのか、それとも本当に将が言うように運命の相手だったということなのか。

「そっか、でも上手くいってよかったな。麻里さん。こいつ、バカだから相手するのも面倒だろうけど、悪い奴じゃないからよろしくね」

一番最初に持ち直したのは久高君だった。柔和な笑みで語りかけると、麻里ちゃんの表情が少し和らぐ。

「ふざけたことを言うようだったら、きっぱり言わないと凶に乗るからね」

「……は」

私も久高君に続いて、言葉をかけると、麻里ちゃんはすぐに緊張して顔を強^{こわ}ばらせる。緊張というより、警戒しているのか。まあ、友達と紹介されてその場に女が二人もいたら、勘繰るのも仕方がない。

「あ、私も夏菜子もさる君には興味ないから安心して。じゃなきや、何年も友達やってないし。そこはご心配なく。どちらかといえば、こちらは麻里ちゃんの心配をしちゃうぐらい」

思っ^ていても口^にできなかつたことを、咲季はさらりと言^つてしま^う。そこにいやらしさはない。私は彼女を安心させるような言葉がまったく思い浮かばず、自己紹介をするのがやつとだった。

この日の将は今までにないぐらい張りきつていて、私たちもできるだけ将を立てて麻里ちゃんの緊張がほぐれるように振る舞^つた。

「俺は麻里ちゃん送^つていくから。それじゃあ！」

将の横^でペコリと頭^を下^げる麻里ちゃん。将と麻里ちゃんが見えなくなるまで私たちは見送^つた。

将が私たちに恋人を紹介したのは初めてのことだった。

「なんか、今までと違うね」

姿が見えなくな^つてから、私はポツリと呟^いた。

「そうねー。誇張^{して}ると踏^んでたのに、本当にお天気おねえさん並に可愛^くて驚^{いた}わ。それにしても、かなり警戒^{して}たわね。付き合^{いた}て、何もかもが不安^つて感じ？ 初々^いわー」

「咲季。その言^い方、ちよつとおばさんくさいよ」

「なによ。夏菜子だ^つて同^い年のくせに」

咲季がおばさんという言葉に敏感に反応^{して}睨^んできたけど、私はそれを笑^つてかわした。将たちが歩いてい^つつた方向^を見ていた久高君がゆ^つくりとこ^つちに向^き直^る。

「今度こそ幸^せになる^{とい}いな。あいつ、いつも勝^手に突^つ走^つて、振^られる^つてい^うのを繰^り返^してきたからさ」

心^からの言葉。

「そうだね」

同意^しながらも、本当^はそうは思^えない私。今^までにない喪^失感^を感^じていた。それはやつぱり将の本^気が見^えたせいかもしれない。社会^人の付^き合^いは学^生時^代のそれとは違^うという咲季の言葉が頭^を掠^める。

彼女^ができ^てもすぐ^に別^れてしま^う将^に私^は安^心して^{いた}。不^幸を願^って^いるわけ^じゃないけど、安堵^{する}気^持ちはあ^つた。必^ず、私^たち^のと^ころ^に戻^つて^くると……何^回でも戻^つて^くると。

「まあ、これ^で夏菜子^もい^い加減^{、踏}ん^切り^がつ^くん^じゃない？」

「え？」

突^然の振^りに表^情を繕^うこ^もでき^ず、私^は咲季^を見^た。

「夏菜子^つてさる君^のこ^とをい^つつも気^にして^たからさ。好^きだ^つたん^じゃない？」

咲季と出^会つた^のは、将^とのこ^とに自^分の中^で区^切り^をつ^けた^あと^だ。心^残りはあ^つてもあ^からさまな好^意を見^せた^ことはない。でも、そのわ^ずかな未^練を咲季^に悟^られた^のかな。

「やめてよ。そ^りゃあ、昔^はそ^うい^う時^期もあ^つたよ。でも高^校生^の頃^の話^{。今}はバカ^な友^達がこ

のまま幸せを掴むことを願ってる。あいつの相手ができるなんて相当なことだもん。麻里ちゃんにはがんばってもらわないと」

「そう？ ならいいんだけど」

家に帰り着くと、全身に重りがついたようにだるくてベッドに倒れ込んだ。あんなふうには咲季に言われてしまうほど、将のことを気にしてたのだろうか。でも言われてみれば、これまで彼氏を作らなかつたのは将のことを待っていたからかもしれない。自分では割り切ったつもりでいたのに、無意識のうちに待ち続けてたのかな。いいな、って思う人がいても、どこかで比べていた。将と過ごす時間。将と喋ること。将の考え方。バカでしようがないけど、そんなバカなところもよくて……ってどれだけ未練たつぷりなのよ。私。いつまで経っても、何年経っても……離れられない。

三 片思いの終わり

将と麻里ちゃんの付き合いが二年を超えた頃には、誰もが今までの付き合いとは違うと感じていた。そして、それは将の行動にも、如実に表れていた。遊びに誘っても断ることの増えた将。付き合いうまでにかけて時間も最長だったけど、付き合いの長さが過去最高の一年を超えると、私たちと遊んでいても、麻里ちゃんが待っているからと早めに切り上げるようになっていた。

私たちの生活にもいろいろと変化があった。咲季が別のお店へと異動した。私は実家を出て、一人暮らしを始めた。そうしたいいろいろな要因が重なり、少しずつ一緒に過ごす時間が減っていく中、珍しく将から集合の連絡があった。少しの時間でいいということで、平日の夜に集まったファミレス。「今更かもしれないけどさ。麻里が不安がるから、俺、こっちに顔出すのやめるわ」「……いきなりどうしたの？ しよっちゅう私たちと遊んでるっていうならわかるけど、今はそんなに集まってるわけでもないじゃん」

本当に今更だと思う。将は誘っても断ることが多く、久高君は仕事がかかり忙しいみたいで休日出勤もよくある。咲季とは職場が離れて、前ほど密な連絡は取れなかった。「本当に今更だな。たまにも駄目なのか？」

「ああ、友達より彼女を取るとか、最低かもしれないけど、俺本気で麻里のことを大切にしたいからさ」

もう二十五にもなつて、さすがに将も学生っぽさは抜けていた。麻里ちゃんとの付き合いも順調みたいで、今度こそ本気で付き合い合っていることは伝わっていた。

「でもさあ、友達と会うなって、麻里ちゃんも心狭いなあ」

「そんなことはないっ」

咲季が軽く言った言葉に、将は強く反発した。真剣な表情。今まで見たことのない将が目の前にいる。私の知らない、麻里ちゃんの作った将。

「別に友達やめるってわけじゃないんだろ？」

「ああ。それはない」

「連れてくればいいのに」

将が麻里ちゃんを連れてきたのは、最初の一回だけだ。邪魔しちゃ悪いとか言って遠慮していると将は言っていた。私だって彼氏ができたとして、その彼氏が女の子のいるところに遊びに行くのを快く見送ってあげることができないと思う。誘われたとしても、自分がその輪に入れるのかも不安だし。

だから、将の決断は間違っていないんだろう。

「本当に本気なんだね」

「ああ」

将の真剣な眼差しは、私を通り抜けて、麻里ちゃんを見ている気がした。もう、戻ってこないんだね。行っちゃうんだ……

「……おめでどうって今更か……。大切にしてくね」

「おう」

照れ臭そうに返事をする将は、大人に見えた。その後は少し話ただけで、将はファミレスから出ていった。私たちを振り返りもせず……

「あいつ、大人になったな」

「うん。……たかが恋愛って思ってたけど、本当に人が変わるんだね」

私はこの日見た、将の背中を忘れないと思う。バカで子供っぽかった将が初めて見せた大人の雰

囲気。

そして、将が抜けたことで私たちが集まる機会は急速に減った。咲季とは連絡を取り合って、たまに一緒に出かけたりしたけれど、久高君とは時折メールのやりとりをするだけになり、将とは……一切の連絡を取らなくなった。

麻里ちゃんの気持ちを考えて、メールをするだけでもなんとなく気が引けてしまった。大体のことは久高君が教えてくれていたし、元気でやっていることを知ることができた。

そして私はその間に、お店に来るお客さんと付き合うことになった。

燃え上がるような恋ではないけれど、一緒にいて苦にならない年上の人。いつでも穏やかに私を見守ってくれる彼に、私は男女の付き合いがそう悪いものではないと、遅まきながら気付いた。そんな素敵な人と付き合っているのに、それでも、どこかで麻里ちゃんを羨ましいと思っている自分想像してしまう、もし将と付き合っていたら……どんなふうだったのかを。

「夏菜ちゃんは俺と一緒にいても、違うところを見ているようで不安になるよ」

「ごめんさい。そんなつもりはなかったんだけど、少しだけ友達のことを思い出して」

ホテルの一室。窓の外は雨が降り、夜が一層暗く見えた。雨で滲んでぼんやりと浮かび上がった夜景が、まるで私みたいに頼りなく感じた。いつになったら、曇りのない気持ちになれるんだろう。「こうしてしっかりと腕に包んでいても、いつかなくなってしまうそうだ」

彼の腕に包まれている私が窓に映る。ぬくもりがあるのに、寂しいと感じる心は何を求めているんだろう。

「ごめんささ」

「謝らないで。ただ俺をちゃんと見てくれればいいから」

私はくるりと体の向きを変え、不安をかき消すように彼に抱きついた。大きな腕に包まれ、キスを交わす。彼の気持ちを受け取りながら、それを返しきれない自分。最初の彼と別れてしまったときと同じだ。

なんで駄目なんだろう。私の心は私の言うことを聞いてくれない。

将が私たちの集まりにもう来ないと宣言してから、そろそろ三年になるだろうか。たまに来る久高君のメールから、将と麻里ちゃんの付き合いが順調なことばかりだった。

数年に及ぶ付き合い。そうなるとその先にあるものは簡単に想像ができる。いつかはそのときが来るのだらうと思いつきながら、私は将がいけない生活に慣れてきていた。

携帯電話を買い換えたときに消そうか迷った連絡先。もう連絡を取ることもないだらうと思つていた将からメールが届いたのは二十八歳の春。久高君と咲季のアドレスにも送られているメールには、もう会わないと告げたときと同じファミレスに集合、と書かれていた。

「俺、麻里と結婚することにした。もう同棲はしてるんだけど、ちゃんとプロポーズした」

「そうか、おめでどう」

予め聞いていたのか、久高君はさほど驚いた様子もなく、お祝いの言葉を口にした。

「おめでどうー！ さる君が結婚かぁ。最初に会ってから八年。なんか年とつたなあ」

咲季も茶化しながらもすぐに祝う。それなのに、私はなかなか口を開けない。言おうと思つているのに、なぜか喋り出せない。

「夏菜子？」

無言の私をおかしいと思つたのか、咲季に問いかけられて私は弾かれたように顔を上げた。

「もー、将が結婚だなんてさ。まさか、あんたが一番乗りなんて予想外よ」

「なんだよ。俺が結婚しちゃ悪いか？」

すぐに切り返す将の表情は笑っている。おめでたいことなんだから笑わないといけな。私、ちゃんと笑えているかな。

「運命なんてバカにしてたけど、信じるしかないよねー。……おめでどう」

お祝いの言葉だけ小さくなってしまったが、将がそれを気にしている様子はなかった。麻里ちゃんとの今後について話す将の表情は幸せそうだ。久高君も咲季も、長く会っていなかったのが嘘みたいに将と会話を弾ませている。

「単人も彼女ができて、咲季ちゃんもついにお付き合い二年超えの彼氏ができたかぁ。で、夏菜子は？」

上の空で相槌を打っていた私に振られた会話に、一瞬だけ詰まった。

「——私も年上の彼氏がいるし、楽しくやってるよ」

「そっか、なんだよ。なんだかんだで、みんな幸せなのかぁ。俺だけだったら悪いかなあ、なんて

思ってたんだけど、安心した」

「ちょっと、婚約したからって随分と上から目線じゃないの。彼氏がなくなっちゃって、友達結婚だよ？ 普通にお祝いするわよ。ねえ、夏菜子」

「うん。もちろんだよ。あの将がまさかの結婚だもんね。職場恋愛で何年だった？ よくまあ麻里ちゃんに逃げられなかったよね。それだけでも褒めてあげたいわ」

「咲季ちゃん、俺のこと上から目線って言っけど、夏菜子のほうがよっぽど上からだと思わない？」
昔からどんなときでも私は軽口を叩いていたけど、それは今でも健在らしい。この場において、ちゃんと会話もしているのに、抜け殻みたいな自分。

「とにかく、幸せになりなよ。うちらもすぐに続くからさっ！」

今度は麻里ちゃんも連れてちゃんと報告しにくることを約束して、将は幸せな表情のまま「幸せのお裾分け」だなんて言っただけで私たちと握手をしてみた。手に残る将の感触。でも、将の手がいつも触れている相手は……なんて考えても仕方がない。

バカみたい。将に彼女ができるたび……将が麻里ちゃんと付き合い始めたときも、もう私たちと一緒に遊ばないと言ったときも、そして結婚を決めたときも。私は何度も何度も気付いて、何度も何度も忘れようとしていた。

ここまで来たらいい加減、バカだと思う。私は結局、ずっと将に片思いを続けてきたんだ。でも、もう終わり。お付き合いと結婚は違う。今度こそ最後。今度こそ諦めないといけない。

もう……待ついても仕方がない。

久しぶりの再会で、大人の……男の顔をしていた将。好きな人を守ろうとする気持ちが、会話をしているだけでも伝わってきた。最初の告白のときに避けられたのがトラウマになっていて、将と離れることが怖くて、再会してからも前と同じようにふざけあって。でも、みんな大人になって。「ごめん。僕から誘ったのに遅くなって」

テラス席からピンクに染まるつつじの植え込みを眺めながら、先日会った将のことを考えていた。向かいのイスに待っていた人が腰かける。

「ううん。たまたま、この辺で買い物してたから。疲れちゃって休憩してたんだ。久高君も何か飲む？」

少し姿勢を正してイスに座り直す。

「もう、頼んできたから」

店内を手で示して、にこりと久高君は微笑んだ。将は落ち着きが出て、成長してきたのを感じたけど、久高君は昔から落ち着いていて考え方が大人だった。だから、あまり変わった印象はない。

「突然誘って迷惑だった？」

「ううん。この前、久しぶりに会ったけど、あんまりゆっくり話せなかったから。こうして誘ってくれて嬉しい」

久高君の前にアイスコーヒーが運ばれてきた。グラスに添えられる久高君の指は、あまりごつごつとしていなくて、ピアニストと言われたらそのまま頷いてしまいそうなほどきれいだ。

久高君のどこを見ていいのかわからず、ついその手を凝視してしまう。

「まだ五月だっというのに暑いね。これから梅雨つゆが来るとは思えないよ。そのまま夏になりそうな気がしない？」

「ゴールデンウィークも終わり、南のほうから梅雨の訪れがちらほらお天気ニュースに上っている。でも、関東近辺はまだそんな気配もなく、日によっては半袖でもいいぐらいの気温になる。今日もそんな暑い日。」

「うん。雨も嫌だけど、このまま九月ぐらまで晴れの暑い日が続くのも気が滅入るよね」

天気の話なんて、話すことがない人同士みたいで、少し緊張してしまう。別に久高君と二人きりなのは初めてじゃないし、普通に会話もできる。ただ、久しぶりすぎて以前の感覚が戻らず、よそよそしくなっちゃった。

「それにしても、将が結婚だよ。雹ひょうか雪でも降るかもね。久高君はある程度聞いてたんだよね？」

天気の話ばかり続くのがなんとなく気まずくて、私は久しぶりに会うきっかけになった、将の結婚話を引っぱり出した。

「うん。けど、僕もそんなに会ってたわけじゃないからね。メールのやりとりばかりだったけど、結婚の話が出てきたとか、婚約指輪がとかって騒いでいるのは知ってた」

「婚約指輪」

結婚をするなら当たり前のことかもしれないけれど、誰かのために指輪を買う将の姿を想像できずに、固まっちゃった。

「この前、麻里ちゃんに会ったとき、指にしてたよ」

「へえ、麻里ちゃんと会うんだ」

将と久高君と、将と私の関係を比べても仕方がないとわかっている。でも、久高君とは会って、私とは会っていない。男友達と女友達の違いが少し寂しかった。

「あ、たまたま。ちよつと物の貸し借りがあって、さるの部屋に行ったから」

麻里ちゃんは最初から女友達を警戒してたもんね。一度しか会ったことのない麻里ちゃんの顔はもうぼんやりとしか思い出せない。それも数年前のことだから、今では大分変わっているだろう。

でも、大人しくてきれいな麻里ちゃんの指に将の買った婚約指輪が嵌まっている映像が頭に浮かぶ。

「麻里ちゃん、元気にしてた？」

「うーん。会ったのは三月ぐらいたったけど、少し顔色が悪かったかな。マリッジブルーかもしれないね」

着々と結婚に向かっていく将と麻里ちゃん。私にもいつか心から好きだと思える人が現れて、結婚とかするのかな。指輪にプロポーズ。漫画や小説みたいに感動的じゃなくてもいいから、幸せを感じられるのがいいな。

相手もないのに頭に広がる妄想。私の左手を取って、薬指に指輪を通してくれる。相手の顔を見てみれば……

「あ、でも最近やっぱり体調が悪いみたいで、将が心配してたな」

久高君の言葉に現実に戻る私。私に指輪をくれたのは、ありえない人。もう、諦めなくちゃいけない人。

「それは心配だね。もう一緒に住んで長いんだろうけど、将に看病とかできるのか、そっちも心配だな」

「それは言ってる。高校時代に、部活中に僕がケガしたら、あいつが手当するって、スプレー式の消毒液をヘッド部分ごと外して、消毒液のほぼ全部を傷口にかけられたことかあったよ」

ものすごく痛そうな話に、私は思わず顔をしかめてしまう。

「想像つく。人の心配とかするくせに、やることが雑なんだよね」

高校時代の将。社会人になってからの将。そして、あまり知らない最近の将。久高君と久しぶりに会ったというのに、将の話ばかりだ。

「あ、そろそろ時間だ」

最近、携帯を時計代わりにしている人が増えているけど、久高君はいつも腕時計をしている。すっかり話に夢中になって、時間ギリギリになっていた。

「まだ間に合いそう？」

「うん。大丈夫だよ」

昨日、メールをもらったときには、てっきり将のことだと思った。ところが、久高君の用件は映画のお誘いで、ちょうど予定の空いていた私はすぐに返信をしたのだ。

それで今日、こうして会うことになった。

昔から将とは映画の趣味が合わなかったけど、久高君と意見が分かれることは少なかった。久高君が合わせてくれていただけかもしれないけど、今日観る映画もわりとすぐに決まった。

映画館で私がトイレに行っている間、久高君は私の好きなアイスレモンティーを買ってくれていた。ミルクティー派の将とはよく言い合いになった。久高君と咲季は、コーヒーを飲めない将と私をいつもお子様扱いしていた。

気付けば将との思い出が頭を巡っていて、嫌になるぐらいだ。

「昨日、メールで言ってたけど、彼氏がいないって？」

将の結婚話が出たときには、彼氏がいるふりをしてしまった。ずっと昔に別れていたのに、将に気を使われるのが嫌で。

最初からぐらついていた私の気持ち。冷めゆく感情は止められず、彼が何度やり直そうと言って、私の意思は変わらなかつた。こんな私でも好きと言ってってくれた彼。

「うん。なんか、お祝いムードでつい嘘ついちゃった。実はしばらく彼氏なし。あれ、でも久高君は彼女いるんじゃないっけ？」

将がそんなことを言っていた気がする。ついに久高君にも彼女かあ。

「あー、あれね。夏菜子ちゃんと似たような感じかな。実は少し前どころか一年以上前の話なんだ。いつだったかな？ 将の奴、自分が幸せなせいか、おせっかいは始めてね」

久高君の言う、将のおせっかいは話の流れからして女の子を紹介するってやつだろう。

「それは、また面倒なことに」

「うん。面倒だったから、その頃にちょうど告白してくれた子と、逃げるようにして付き合ってたんだ」

久高君がそんな理由で彼女を作るとは思わなかった。一年以上前に別れてしまっているということは、付き合いはあまり長く続かなかったのかな。

「まあ、そんな理由で付き合い出したせいとか、やっぱり彼女と距離が縮められず、振られちゃったんだけどね。それを将に言うともまた面倒に巻き込まれると思って、ずっとそのままにしてる」

「そうなの？」

久高君を振ってしまうなんて、何が気に入らなかったのだろう。どんなきっかけであっても、一度付き合ったなら、久高君は彼女を大切にしようなのに。

「それよりも、僕には本当のこと言ってくれるんだね。彼氏のこと」

「うん。嘘つく必要ないからね」

実は少しだけ迷った。でも、「彼がいるのに連絡をしてごめん」なんて出だしのメールをもらったら、申し訳なくなってしまったのだ。それに久高君の前でくらい、素の自分でいたかった。将の前だと意地を張ってしまうから。

「ちょっと嬉しいな」

どういう意味かと聞こうとしたところで、上映開始を知らせるブザーが鳴り、話はそこで終わってしまった。

前評判もよかったその映画は、結構私好みの展開でかなり満足だった。待ち合わせ自体が遅かつ

たのもあり、映画館を出ると、うっすらとオレンジ色に染まった空が一日の終わりを告げようとしていた。

「まだ時間平気？」

「うん。今日は待ち合わせの前に用事を済ませたから」

「じゃあ、夕飯でも一緒にどう？」

「いいね」

喫茶店と映画。その間に交わした会話のおかげか変な緊張感はなくなっていて、私の気持ちも大分緩み出していた。将の結婚話を聞いてから、ポツカリと心に穴があいたような喪失感があったけど、今日はかなり楽しく過ごしている。

久高君がたまに行くというスペイン料理のお店は、あまり気取らず、かといって安っぽくはないお店。料理も美味しくて、ワインを二人で飲みながら映画の話題で盛り上がった。今日観た映画はもちろん、ここ最近やっているものや、DVDを借りて観たものまで。私が話に出す映画を久高君はほとんど観ていて、やっぱり好みが合うのだと再認識する。

「将と久高君と映画を観に行ったことあったじゃない。何を観るかで将と揉めてさ。あのとき私、実は久高君が私と将のくだらない言い合いを終わらせるために私の味方してくれたんだと思ってたんだ」

「なにそれ。いいと思うものは、さると意見が一緒でもいいって言うよ。まあ、今までにさると意見が一致したことなんて片手で足りるくらいしかなかったけど」

冗談めかして言う久高君に、久しぶりに声を出して笑った。将が抜けてから、私は外に出て遊ぶことがめっきり少なくなった。職場の人間と飲みに行くことはあったけど、プライベートで出かけたり、何かで盛り上がるのは久しぶりだ。

「やつと前みたいに笑った」

嬉しそうな笑顔で久高君は私を見ている。

「なんか、この前は笑ってるのにどつか寂しそうだったし、今日も元氣よく笑うってことがなかったから」

いつもと同じ穏やかさで、冷静に周りを見ている久高君。だけど、違和感を覚える。どこがとは言えないけど、何かが違う。

「今日言うべきかちよつと悩んだんだけど、一緒に映画を観て、話をしてたら決心がついたよ。本当は確かめるだけでよしとしようかと思っただけだね」

意味深な発言をしながらも、久高君は穏やかに微笑んでいる。だけど真正面から向けられる視線は穏やかというのとは少し違う。何かを決心している目。

「何を確かめるつもりだったの？」

「んー、なんていうか。そうだな、自分の気持ち、かな」

一言、一言を区切りながら、言葉を大事にしているみたいに言う。久高君の気持ちって……

「僕さ、姉がいるの知ってる？」

「あ、うん」

高校時代に聞いた覚えがある。お姉さんがいて、末っ子って表現をしてたから、なんとなく三人姉弟の末っ子を想像していた。

「今は平気なんだけど、高校のときは恥ずかしくて、姉の年齢を言えなかつただけだよ」

「いくつ上なの？」

「十二歳上と、十歳上。二人とも姉」

それは言いくいのもなんとなくわかる。高校生の頃なんて、年の離れた兄弟がいるだけで、ネタにされたもんだし。でも、久高君は落ち着いた雰囲気があつて、からかいづらい印象だったから、言つたところで、ネタにされるようなことはなかつたと思う。つて、今更十年前のことを言つても仕方ないけど。

「とにかく、姉二人には敵わなくてね。横柄で我侷わがままで、弟を家来わがままとしか思っていない。まあさすがにこの年になると落ち着いてきてはいるけど、未だに頭が上がらないんだ」

「なんか、久高君の落ち着いた雰囲気や優しさのルーツを知つた気分」

家で鍛えられてきたってことなんだよね。本人にしてみれば嬉しいことでもなんでもないんだろうけど、それが原因で今の久高君が形成されているなら、結果的によかつたと思う。

「ま、全部そのせいとは言わないんだけど、どうしても女性に対しては腰が引けちゃう傾向があつたんだ。彼女に振られた原因もそのあたりにあつたりするのかもしれない」

今までなかなか彼女を作らなかつた理由がわかつた。ようやくできた彼女にも上手く自分を出せなかつたのかもしれない。久高君とは長い付き合いだけどわからないことはまだまだあつて、私も

全部をさらけ出しているわけではない。

「今のままの久高君がいいと思うよ。お姉さんとのことはなんとも言えないけど、心配りができて穏やかで、なんでもこなせるっていうのは、なかなかできることじゃないし。それが自然にできるんだから、そう悪いことじゃないって思っちゃうけど」

私なんか、高校時代、しょっちゅう将に久高君のほうが女らしいって言われてた。

「それに、高校時代はもちろん成人式のときだって、クラスの女子は久高君に話しかけたくてうずうずしてたんだよ。人を寄せ付けない雰囲気があつてみんな苦労してたけど。久高君がその気になればすぐに彼女ができると思う」

なんだつたら、お店の後輩とか紹介してもいい。でも、紹介されるまでもなく、久高君の職場にも恋心を秘めた子はいそくだよね。どことなく壁を作つてるところがあるから、それさえなくなればすぐだと思う。

「なんか、夏菜子ちゃんに言われると嬉しいな。本当にそう思う？」

「もちろんっ！ 私なんかに保証されても意味ないかもしれないけど。自信を持つていけばいいと思うよ。久高君があるののままの自分を見せられる相手を見つけたらさ」

「じゃあ、付き合つてつて言つたら、付き合つてもらえるかな？」

「え？」

冗談？ 久高君がそんなことを言うのを一度も聞いたことないけど。冗談じゃないとしたら本気？ それこそ聞いたことない。いや、聞いたことがあれば告白されたことになっちゃう。

「あ、ごめん」

何かに気付いたように謝罪を入れる久高君。ちよつとドキツとしちゃったけどやっぱり冗談だったのか。残念に思う気持ちもないわけじゃないけど、それよりも安堵のほうが大きい。

「びっくりしたよー。久高君はそんなこと言うキャラじゃないのにさー」

ごまかすようにワインを一口含み、自分を落ち着かせる。まさか、こんなふうに際どい冗談を久高君が言うなんて、予想外だった。

「自分の気持ちに自信が持てた。僕、夏菜子ちゃんのが好きなんだ。付き合つてつて言う前にちゃんと気持ちを伝えないと駄目だよね」

息が止まるかと思つた。告白されるのは初めてじゃない。でも、こんなにも驚きとドキドキを伴うのは初めて。冗談かと思ひ安堵したところだったので、かなりの衝撃を受けている。何か言わなといとけない、返事をしないとけないと思うのに、喋り方を忘れてしまったみたいに声が出なかった。

最初に浮かんだのは断ること。久高君は私なんかには勿体ない。価値観なんて人それぞれだし、誰が誰を好きになつても自由だけだ。それでも、久高君が私を好きになるなんて、そんなことはありえない。

「ま、待つて」

少しの間だったのか、ものすごく時間が経つたのか。お店の中の喧騒は、ボリュームをしばつたみたいに耳に届かなくなつていた。静寂の中に私と久高君だけがいるような錯覚。そんな中で、よ

うやく出た一言。

「うん」

気軽に返事をされて、私は必死に頭の中で状況整理を始めた。最初に、私は久高君がその気になればすぐにでも彼女ができるって言った。で、そのあとに久高君から付き合ってくれる？ と聞かれて、さらには好きって……私のこと好きって言った。

いやいや、待ってよ。久高君とはついこの間、将の結婚報告のときに数年ぶりに会ったんだよ。久々の再会、そして二回目で告白ってある？

「えっと、最初に確認してもいい？」

「いいよ。僕に答えられることなら」

「本気？」

「もちろん。僕が冗談とか得意じゃないの知ってるよね？」

さも当然といった返しに、私は再び頭を抱え込む。にわかには信じがたいけど、久高君は私を本気で好きみたい。

「知ってるよ。さるのことも」

「……え？」

混乱しているけど、久高君からの告白ってことで、多分ちよつと浮かれてた。そんな中、冷水を浴びせられたみたいに、私は表情も言葉も失った。

「前にさるがもう会わないって言ってきたとき、さるが帰ってから咲季ちゃんにさるのこと言われ

てたよね。確信したのはそのときだけど、高校のときからなんとなく想像はついてた」

口の中の水分がなくなってしまうかと思うぐらい喉がカラカラになる。久高君が言っているのは将に対する私の気持ち……だよ。ね。

「どう……して？」

私ってそんなにわかりやすい態度をしてた？ だって、彼氏がいたりもしてたんだよ。それでも、気付かれるって。

「見てたから」

少し寂しげで、それでも口元には笑みを浮かべながら、ふいつと逸らされた顔。

「なんとなく、いいなって思っただけ。無意識のうちに目が追いかけてた。でも夏菜子ちゃんの視線の先にはいつもさるがいた。それは高校時代も成人式で再会したあとでもずっと変わらず」

なんか泣きそうになってきた。私が将を見ている間にも私を見ている久高君がいた。半ば信じられなかった久高君の気持ちの本気なんだって伝わってきた。何かできるわけじゃないけど、夏菜子ちゃんが幸

「本当はずっと応援しているつもりだったんだ。何かできるわけじゃないけど、夏菜子ちゃんが幸せになればいいと、見守っているつもりだった」

私はきゅつとスカートを握りしめて、久高君から目を逸らした。そして自分の手をぼんやりと眺める。さっきまでの高揚した気分とは違う。見られたくない部分を見られてしまったような気まずさ。

「本当は気持ちを伝えるつもりはなかったんだ。でも、この前久しぶりに会ってみて、やっぱり夏菜子ちゃんがいいなって感じた。そして、変わらず夏菜子ちゃんは切なげにさるを見てた。こんな

言い方、失礼になるけど、何も言えないままさるの結婚をお祝いする夏菜子ちゃんを見てたら、自分にはムリなんじゃないかって。夏菜子ちゃんが誰かと結婚するのを僕は祝えない。たとえフリーだとしても」

ぎゅーっと目をつぶった。心の中を暴^{あは}かされている。将と一緒になれる可能性はなくなった。それは私が何もしなかったからこそその結末。

「……でも」

「うん。僕も長い片思いの果てもん。すぐに答えがもらえとは思ってない。この気持ちを伝えることで夏菜子ちゃんを苦しめるかもしれないから、言うかどうか悩んだんだ。でも、何もせず後悔したくなかった。ごめんね」

最後の「ごめんね」にはどんな思いが込められているんだろう。隠していた気持ちをあつさりで見破られていた自分が情けない。全く久高君の気持ちに気付けなかったこともふがいなかった。正直、気が重い。

「こんなことアピールするのも変だけど、僕はあるんな夏菜子ちゃんを知ってる。僕のことを恋愛対象として見てなかったこともね」

こっそり、久高君に視線を戻すと、彼の横顔が目に入った。言われてみれば、ここまで私のことを知っている人はいないかもしれない。

「だからさ、すぐにじゃなくでもいいんだ。ちよつとでも友達以上になれないか考えてみてよ」

ふいに正面を向いた久高君と視線がぶつかった。言いたかったことを言い終えたせいなのか、曇

りのないスッキリとした表情。柔和なのに、意思の強さを感じさせる目。私は久高君に思ってもらえるような人間じゃない。

でも、久高君は私の歪んだ片思いを知っていて、それでも気持ちを伝えてくれた。

「返事……すぐ待たせるかもしれない」

「構わないよ。今までの時間に比べたらたいしたことないし」

久高君はいつから、と明言したわけじゃない。どのぐらいの片思いなのかわからないけど、でもそれなりの期間なんだろう。それを考えたら、本当に返事を待たせていいのか不安になった。

「久高君……あの」

「返事、待たせてよ。僕のことを心配してくれるなら、じっくり時間をかけて、よく考えてからにしてほしい。時間をかけて、ちゃんと考えて、それでも無理なら無理でいい。でも、この場ですぐに返事をされても納得できないから」

私の言おうとしたことを先んじられて、きゅつと唇を噛む。久高君の言いたいことはよくわかる。私も長い片思いをしてきたから。だから余計に久高君の気持ちが辛い。

「そんな顔しないでよ。困らせたくて言ったわけじゃないんだ。振られたら気持ち的にスッキリできるし、もしOKしてくれるならラッキーって感じだから」

私はその言い分に曖昧ながらも笑顔を見せた。これが久高君の優しさだと私はわかっている。それに甘える自分の弱さ。でもここで意地を張るよりも、久高君の言うとおり、少し考えてみるのもいいのかもしれない。

「わかった。ちゃんと考えて答えを出すから。あんまりずるずるしないようにする」
「うん。のんびりと待つから、とにかく焦らないでもらえると嬉しいよ」

久高君がワインを飲む。テーブルに置かれた久高君のグラスにワインを注ぐ。真つ赤な液体がこの先の何かを暗示している気がした。意味などわからないが、とにかく自分に転機が訪れているのだと感じた。

四 落日

久高君に告白された日。彼は家の前まで私を送ってくれた。別れ際も私を急かすようなことは言わず、にこやかにおやすみと言って帰っていった。

それから毎日とは言わないけれど、時間があるときには久高君のことを考えるようになった。ちゃんと返事をする約束したからには、自分なりの答えを出そうと思ったから。それがどんな答えでも、久高君ならわかってくれる。そう思うのは告白された者のおごりなんだろうか。久高君との付き合いもかなり長いものになっている。どんな性格なのかは、それなりにわかっているつもりだ。もちろん、知らないこともたくさんあるのは承知だけど。その気になればすぐに彼女ができる、と断言できるぐらい、久高君の性格はいい。

将みたいに無駄に喋ることはなく、かといってずっとだんまりでもなく、ちゃんとこちらの話を

聞いていて、ときに的確な返答をくれる。バカ騒ぎはしないけど、冷めているわけではない。

久高君に文句のつけようなんてない。それでも、恋愛ってやつは、こっちは駄目だった、あっちにいい人がいるからあっちにしよう、とはいかない。いくら本人がそれでいい、と言ってくれたとしてもだ。やっぱり何かが違うと思う。

これまで何人かの男の人と付き合ったけど、結局最後には心のどこかで将と比べていた。だけど、久高君は十年来の友達だし、今までの人のように別れました、もう連絡は取りません、とはいかない。久高君と付き合っている様子を想像しようとするけれど、全然浮かばない。それならば断るべきだと思うのに……私の気持ちの全てを知っている久高君に私は素の自分で接することができる。気飾ったり、よく見せようとしなくて済む。そうしているうちに、いつかは私の気持ちも変わるかもしれない、なんて思ってしまう。

そう思う反面、結局そうならなかったときのことも考えてしまうのだ。なによりも、やっぱり都合がよすぎる。将を忘れるために利用することになる。今はそれでいいと久高君が言ってくれても、いつの日かそれが久高君を傷付けないとは限らない。

「やっぱり、付き合うべきじゃない……よね」

そのとき浮かぶのは、高校時代に将に振られたときのこと。自分勝手かもしれないけど、もし私が断ったとしても久高君と友達の間は終わらせたくない。あの頃とは違って大人になっているし、相手も状況も違うけど、そう思った。

私はもしかしたら優柔不断なのかもしれない。誰も傷つけないと思いつつ、最後にはいろ